

山北(宮原・高野)の集落と御嶽

長濱 幸男(宮古島市総合博物館協議会委員)

はじめに

本稿は里と御嶽をテーマとする。人々の暮らしぶりが、御嶽に反映すると考える。里の歴史を振り返ることで、御嶽や祭祀^{きいし}のありようを考察したい。

宮原とは、1957(昭和32)年に宮原小学校が独立したことに伴い、付けられた地名である。それ以前は、山北と呼ばれていた。高野は1961(昭和36)年大神島と水納島からの入植者によって旧山北の大野越につくられた集落である。したがって山北とは、宮原と高野の旧地名である。

山北の歴史は、古層の村・西銘村から始まる。按司時代に炭焼^{たる}太良の住んでいた村である。炭焼^{たる}太良の三代目の後継者となる飛鳥^{とびとりや}爺の時代になると西銘村に加え、おわて村、かたて村、いこむ村、きやけ村ができたといわれているので、その場所についても考えてみたい。

飛鳥^{とびとりや}爺が白川浜^{けつとう}の決闘で敗れると、西銘村、おわて村など滅亡したというのが、検証したい。1725年頃から飛鳥御嶽近くで村の再建が試みられるが困難を極める。その原因についても調べてみた。明治の初め頃、荒れ野が原の山北を開墾するため、人が住むようになったと考えられる。各里の地名の由来や御嶽の創設の時期についても考察したい。現在、宮原と高野には44カ所の御嶽がある。御嶽で執り行われている祭祀^{きいし}は、どのような形で受け継がれているのかも考えてみたい。

第1章 山北(宮原・高野)集落の歴史の変遷

1-1 宮古島の玄関と炭焼^{たる}太良

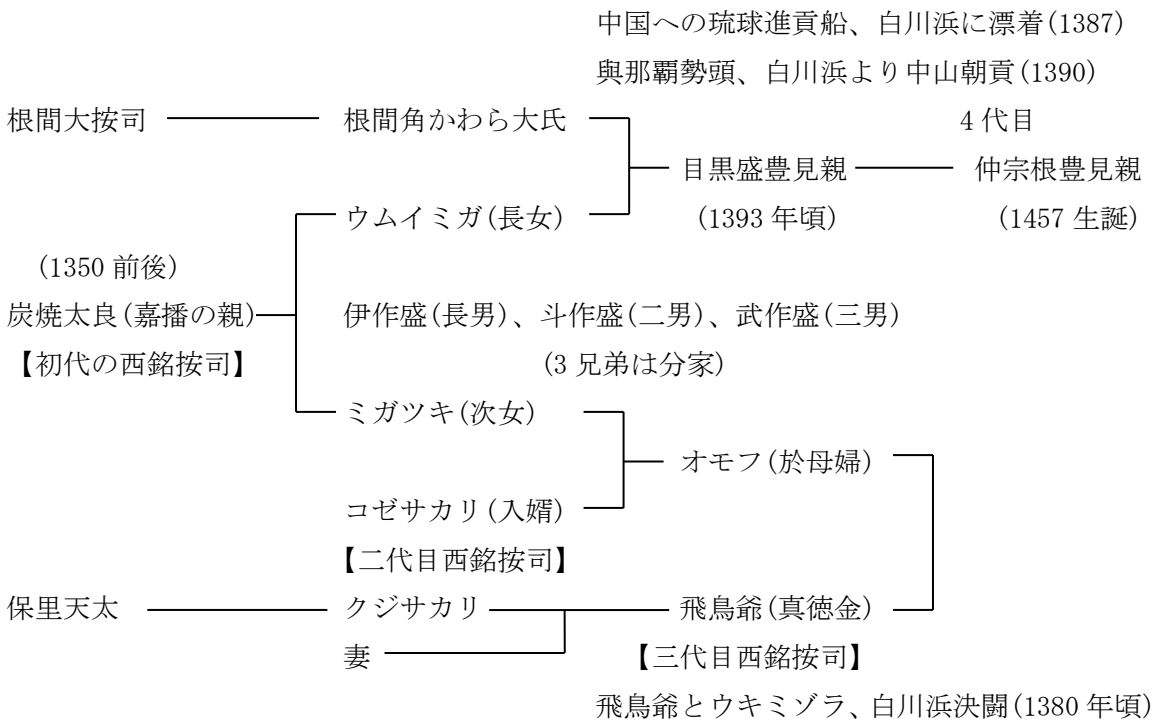
現在の高野漁港は、白川浜と呼ばれた海岸につくられた。この漁港の船溜まり^{ふなだ}から西の方向にある防潮林の中に記念碑が建立されている。「与那覇勢頭^{せんととゆみや}豊見親^{とよみ}沖繩島^{おきな}発見^{はつしん}出発^{しゅつぱつ}之地^{のち} 1957年^{ねん}建立^{けんりゅう}」との文字が刻まれた碑である。宮古島の与那覇勢頭^{せんと}が、この白川浜から船を出し、初めて沖繩本島に渡り、中山^{なかつやま}の蔡度王^{さいとおう}とつながりを示したものである。船出の時期は、今から625年前の西暦1390年である(『球陽』)。白川浜には中国に渡航中の中山王の使いが、漂流^{きょうりゅう}してきたとも伝えられている(『宮古史伝』)。当時、宮古島から沖繩本島や八重山に行き来した場所はここだけであり、宮古島の玄関だったのである。

白川浜のウナギ養殖場より東を眺めると丘陵地^{きゅうりやうち}があり、嶺^ねのところに西銘城跡^{にしめじょうせき}がある。城

の主は嘉播の親と称された人である。妻をめとる頃は炭焼太良と呼ばれていた。宮古島の古文書『宮古島記事仕次』には、次のように記録されている。「西銘の村に炭焼太良という有徳の人あり。野崎長井の里に真氏と称す大福の婦人あり。萬穀の精のお告げにより二人は結ばれた。次第しだいに富貴栄耀して後には西銘の主となり、嘉播の親と名乗りしは、この人なり」。

嘉播の子孫についても『宮古島記事仕次』でくわしく書いてある。「嘉播の親の長女・ウムイミガは、根間の大按司の二男・角かわら大氏の婦人なり。嫡子一男目黒盛豊見親、其の子・真角與那盤殿、其の子普佐盛豊見親、其の子・真誉の子豊見親、其の子仲宗根豊見親なり」。この一門の系図は、忠導氏家譜とぴったり一致している。

1-2 炭焼太良の系統図



ここで、炭焼太良はいつ頃の人か考えてみたい。仲宗根豊見親の生誕は 1457 年と伝えられており、炭焼太良は 6 代目の祖先となる。砂川(1989)の「宮古島郷土史考」による年代計算では 1 代祖を 16 年とする。16 年を 6 倍すれば 96 年前となる。単純計算では 1457 年から 96 年を引けば 1361 年となる。ところが炭焼太良の娘ウムイミガには 3 名の兄弟がいる。ウムイミガが最初の子であるかどうかはわからない。4 番目に生まれた子の可能性もある。そのた

め炭焼太良の生誕を 1350 年ごろと推定することにした。

炭焼太良(嘉播の親)の孫にあたる目黒盛豊見親は、宮古島の各地を荒らし回っていた與那覇原軍を打ち破り、島を平定した英雄である(『記事仕次』)。また、仲宗根豊見親は首里王府軍の先導をつとめ、1500 年に八重山のオヤケ赤蜂を、1522 年に与那国の鬼虎を討ち破った。仲宗根豊見親は、中山の尚真王より宮古頭職に任命された英雄である(『球陽』)。

目黒盛豊見親や仲宗根豊見親は宮古神社に神として祀られているが、この二人の元祖となる炭焼太良は西銘御嶽に祀られている。近くには飛鳥御嶽には炭焼太良の孫娘・オモフの入婿である飛鳥翁が祀られている。

先に取り上げた『記事仕次』によれば、西銘村で一人炭を焼いて暮らしていた炭焼太良は、真氏(モウシ)をめとりて、三男二女をもうけた。長男は伊作盛、二男は斗作盛、三男は武作盛という名前で、三人とも親不孝者であるため分家させた。この 3 兄弟は父・炭焼太良(嘉播の親)が年老いて盲目になった時、父を巧みに誘い出して、北海岸のコスクアカという干瀬で溺死させようとした。父・嘉播の親は幸運にも鱻に助けられ、一方フカ退治に海に出た 3 兄弟は竜巻に呑まれ命を落とすという伝承である。この親不孝な息子たち物語が、こと細かく書き記されたのはなぜなのか。子どもは親の鏡ともいわれるから、炭焼太良の出自を暗に示唆したものと受け止めることができる。

ところで二人の娘は親孝行で、長女・思免か(ウイミガ)は根間角かわら大氏(うぼうず)と結婚し、目黒盛をもうけている。炭焼太良はコゼサカリを次女・目娥津喜(ミガツキ)の婿に迎えの跡継ぎとした。コゼサカリは二代目西銘按司となり、可愛い一人娘をもうけた。「その一人娘・於母婦(オモフ)は嬋娟たるに類あでやかにして、一度たび笑みは傾国の色あり。按司、これを寵愛すること手のひら珠の如し」(記事仕次)。この美女の婿に迎えた若武者が、俊足で武勇すぐれた飛鳥翁であった。彼の童名は真徳金で、ムイガー近くの箕の隅村で育った。飛鳥翁は炭焼太良の孫娘・オモフの婿となり、三代目西銘按司となったのである。『記事仕次』は「やがて婚礼かたのこたく執り行い、入婿として西銘のぬしになる。是より威風遠近に振り、いよいよ名高くなりけり。西銘城未申(南西)に向かう。長さ 90 間(162m)、横 46 間(82m)、その形今(1748 年時点)に存在する。西銘間切りは、西銘村、おわて村、伊こむ村、きやけ村ありし」。

以上の 4 行はとても短い文章ながら、大事なことが書いてある。1 つは城の造営についてである。初代城主炭焼太良の居城は、現在の西銘御嶽となっている。広さは「その東西 30 間、南北 15 間位で、門は東に開いている」(稲村 1972)ことから 15 アール・1 反 5 畝ほどである。飛鳥翁の西銘城は、規模が 130 アール(1 町 3 反)、正門は南西の方角になっている。明らかに別々の城である。現在の飛鳥御嶽のあるところが西銘・飛鳥城ということになる。

2 つ目は飛鳥爺が三代目西銘按司になってから、^{いふうえんきん}威風遠近にふるまい、その名をとどろかせ城を新しく造営し、「西銘村、おわて村、伊こむ村、きやけ村」を領地にしていたことである。『^{きゅうよう}球陽』には「かたて村」も付け加えられ、5つの村になっている。この5つの村をまとめて^{にしめまぎり}西銘間切と記しているが、正式な間切ではない。宮古島に平良、下地、砂川の3間切りできるのは1629年からである。飛鳥爺の時代の西銘村を「西銘間切」と称したのは、西銘村に複数の村落があり、とても広い村だったことを伝えるためであろう。

1-3 ^{かじがみ}鍛冶神の^{たろ}炭焼太良

『宮古島記事仕次』(1748年)は忠導氏^{うぶしゆ}おやけ屋大主、友利村の^{おおやこ}首里大屋子、つまり村番所のトップにあった人の、古老たちから聞き取り記録(古事)に基づき、宮古島に派遣された^{ざいばんひつしや}在番筆者がまとめたものである。前節でみたように炭焼太良の子孫の生い立ちは詳しく述べられている。しかし、炭焼太良の生い立ちは明らかにされていない。炭焼太良の出自を知ること、二代目、三代目(飛鳥爺)西銘按司がどのようにして領土を広げ、「西銘間切」(大きな村)の全盛を築いたかを知るためにも必要なことである。

炭焼太良の研究で、その先駆けの学者は^{やなきだくにお}柳田國男である。『柳田國男全集第一巻』にまとめられているので要約して紹介する。また、あわせて^{さいし}鍛冶神の祭祀も取り上げてみた。

(1) 柳田國男の炭焼長者論

柳田は炭焼長者伝説が大分県を起点に、全国に広がったと述べている(『柳田國男全集第一巻』1968)。その概要は次のようなことである。極めて貧しい若者が、山中で1人で炭を焼いていた。そこへお神のお告げによって、押しかけ嫁がやってくる。嫁の生まれつき備えた徳を得て、炭焼は長者になるというもの。そんな話が北は青森県から南は鹿児島県、さらに南に進んで沖縄諸島、宮古島まで若干の変化を以って、疑いもなき^{るいわたど}類話を留めていると記している。柳田は、沖縄本島山原地方にも炭焼長者の伝説が残されていることをつき止め、沖縄本島と宮古島の二カ所の話を重ね合わせれば、^{しんとうき}琉球神道記の^{ごうしゅう}江州由良里の物語に近いとも述べている。そして慶長の初め頃(薩摩の琉球進攻1609年前)、『琉球神道記』を書いた袋中上人に關係する本土の人から、話を聴いて記憶してた者がいたと記している。

宮古島の炭焼太良の経歴については「自分(柳田)がここに問題としてみたい唯一の点は、冬も単衣ですむような常緑の島に在って、なお且つ炭を焼きつつ終に長者となる」ことから、単なる炭焼ではなく、炭を使った鍛冶職人に間違いないと証言している。「荒れたる草の庵^{いおり}の炭焼太良が、たちまちにして^{いぼりゅうりゅう}威望隆々たる嘉播二屋になったのを、ユリと称する^{こくれい}穀霊の助けとするまでには、その背後に^{たたら}潜んでいた踏鞴の魅力が、殊に偉大であったことを認めねば

ならない」。(ふいごとは金属の加工に用いる火をおこすための送風機。足で踏むものが踏鞴)。炭焼太良は鞴を使ってヘラやカマ等の農具を作り、島人の耕作を助けたために、船立御嶽や長山御嶽の神と同じように、鍛冶の神であると柳田は述べている。

祭度王についても触れている。「王がまだ志を得ずして浦添城西の村にわびしく住んでいた時、勝連按司の姫を妻に迎え入れて、この奥方の教えにより放置された庭の宝を見直した。この宝を使って大和船から鉄を買い求め、農具をつくり島人に分け与え、一朝にして民衆の信頼を得た」というのは興味ある伝説だと述べている。

柳田が取り上げた祭度の伝説と比べてみると、炭焼太良が「嘉播の親」と呼ばれた理由が推測できる。「嘉」は嘉利吉(カリユシ)で、「播」は播く(マク)とも解釈できる。嘉播の親はカマやヘラなど農具を作って百姓に配った人で、それを称える名前だと考える。ストレート読んでもカマ(鎌)を作り出した親である。

(2) 宮原の鍛冶神への感謝祭

宮原の各里は、旧暦11月8日に、「フーツキョーカ」祭祀を行っている。本土でも沖縄本島でも、旧暦11月8日が鍛冶神への感謝祭で、「ふいご祭」と呼ばれている(福地1989)。この時期が良い製品ができるといわれている。「フー」は「ふいご」で、「ツキ」は「月」、「ヨーカ」は8日、「ふいごの月は11月」である。祭りの日が同日であることは、フーツキョーカが本土の「ふいご祭」の影響を受けた証である。ところが、忠導氏家譜も炭焼太良の履歴・職歴を語らず、鉄製の農具を作ったことも語っていない。

カッチャー御嶽の祭神について、一部に「カニシュー」ではないかとみる向きもあるが、これは船立御嶽や長山御嶽の祭神の「金殿」が影響していると考えられる。山北の古い村である西銘村に初めて鉄の農具をもたらした人は、嘉播の親(炭焼太良・西銘主)で、鉄の農具を広め、農業を発展させた人は、西銘主の後継ぎの真徳金(飛鳥翁)である。ここでは、山北・宮原のフーツキョーカのあり様をまとめた。

- ① 鍛冶の神を祀った御嶽をカッチャー御嶽という。宮積、ムテヤ、スナ、サガーニ、南増原、北増原、瓦原、土底、更竹のすべての里にカッチャー御嶽がある。鍛冶屋を意味する言葉で、このカッチャー御嶽は西原の福山、大浦、島尻にも残されている。ところで西仲、来間、宮国ではカンジャー御嶽と呼ばれている。宮国のフーツキョーカ祭は船立御嶽に合せたものと理解されている(『平良市史』9巻御嶽編1994)。
- ② カッチャー御嶽は鍛冶場と前庭からなり、鍛冶場は木炭や木材を燃やして強い火が起せるように、自然石を円周に積み上げてある。広さは直径が役1尺前後で、石積みの高さは60cm程度、一種の窯のようなものである。ヘラやカマ、クワの修理のための、共同鍛

冶場と伝えられている。当時の家はカヤぶきであり、屋敷内で強い火を焚くことは禁物で、共同鍛冶場が必要でだったのであろう。鍛冶場を裏付ける道具は、戦時中に徹^{ちようほつ}発されたと考えられるが、2か所のカッチャー御嶽に鉄塊が、隣村のカッチャー御嶽には鉄のたたき台カンカー(カナカ、鉄床)、ハンマー(大鎚)が残されていた。露天の鍛冶炉なのでファイゴは使われていない。こうした共同鍛冶場の跡が、鍛冶の神を祀る御嶽として崇められている。

- ③ 南増原のカッチャー御嶽では、サス及び幹事が、事前に次の品を準備する。「キビナ1袋、大豆2袋、野菜冷凍5袋、産品茶2匁酒1升、三枚肉と焼きそばの折詰40個」。祈願ではサスが線香、酒、塩、洗米、パナユニ、鮮魚の頭、豚の骨と血を供物として捧げる。参拝後、鍛冶場の前庭で準備された折詰や飲み物を頂戴し、鍛冶神への感謝の祝いをする。1960年(昭和35年)までは、1頭の豚をと殺し、頭は鍛冶神に供え、肉は鍛冶場の前庭のカマドで炊き出し、参拝者がいただいた。

南増原以外の里でもフーツキョーカ祭は粟プース[°]、ユースタミ・シツと並ぶ大事な祭りになっている。

(3) 西銘城跡の遺物

西銘遺跡の本格的な発掘調査は、まだされていない。石塚^{いしづか}は確認されているが、鉄滓等はまだ見つかっていないので、鍛冶との関係は明らかではない。

下地(1983)は「遺物(表採)から見た西銘城は褐釉陶器^{かつゆうとうき}いわゆる南蛮陶器^{なんばんとうき}が圧倒的に多く、反して土器は極小である。他の遺跡でこのような例はなく、この西銘城だけである。褐釉陶器が遺物の大半を占めることが何を意味しているかは不明であるが、海外のものであるだけに、そのことを抜きにしては考えられない。いずれにしても、もし西銘城が陶磁器^{いっきよし}に依拠していたとすれば、他に比してかなりの文化レベルを持っていたのではないだろうか。」と分析している。須恵器^{すえき}も見つかっており、それは奄美群島徳之島の「カムイヤキ」だと考えられる。カムイヤキが滑石製石鍋^{かつせきせいしなべ}と玉縁白磁碗^{たまぶちほくじわん}とあわせて出土した場合、考古学では3点セットと称され、福岡県や長崎県、そして鹿児島方面からの渡来であることが広く認められている。その一部が、沖縄本島を経由して西銘城に導入された可能性は高い。中国で作られた陶磁器なども九州、福岡あたりから奄美群島、沖縄本島を経由して入ってきたことが、これまでの遺跡調査で明らかにされている。

(4) 外間遺跡の遺物

外間遺跡^{ほかま}は『雍正旧記』^{ようせいきゅうき}に炭焼太良の子孫・目黒盛豊見親一族の墓と記録されている。発

掘調査の結果、14世紀から16世紀の埋葬人骨が検出された。

最近、遺跡から出土した人骨のミトコンドリア DNA を分析し、生存時のルーツを探る研究がすすんでいる。国立科学博物館人類研究部長・篠田謙一氏は、宮古島の外間遺跡から出土した遺骨から、ミトコンドリア DNA ハプログループ M7 a とハプログループ G を検出することに成功した（『琉球新報』2014. 4. 14-18）。「M7 a は北海道や本土日本の縄文遺跡から出土した人骨からも検出されており、縄文時代以降、広く列島の集団に共有され、沖縄地域に多い」と説明されている。「G はアジアの北方系集団に多いもので、先史時代から琉球列島に存在したとは考えにくく、D4 と一緒に動いたハプログループだと考えられる。D4 は農耕の広がりによって弥生時代以降に沖縄にもたらされたと考えられる」と述べている。

外間遺跡の第5号人骨は M7 a タイプで、第4号人骨は G タイプとなっている（久貝 2014）。土肥（2010）の分析では「第5号人骨は女性で20歳代の成人で身長は140 cm前後で小柄な女性」。また「第4号人骨は男性で30歳代の成人で身長は158 cmである」（『外間遺跡』）。第4号人骨が目黒盛の父親の遺骨であったとしても、第5号人骨と含めて考えれば、本土や沖縄本島の人間の DNA を、目黒盛豊見親一族が持っていることが明らかとなった。これは炭焼太良が、大和からの渡来人であることを示唆するものである。

1-4 西銘間切の各村の位置

西銘按司の時代、宮原の北海岸あたりを拠点とする地域が、「西銘間切」（大きな村）である。その中には西銘村、おわて村、伊こむ村、きやけ村、かたて村があり、飛鳥爺の領土になっていた。では、その村々とはどこなのか。現在もその痕跡を確認できないかなど各村の存在について考察してみた。

(1) 西銘村

ニシ（北）のンミ（嶺）の村といえ、広く北海岸を指す場合もある。しかし、当時は「西銘間切」の西隣には石原城があり、東隣に高腰城や野城があった。したがって、西銘御嶽周辺という限られた場所が西銘村ではなかろうか。西銘城跡から陶磁器などの遺物が見つまっている。また、周辺には牧場跡ではないかとみられているサガーニ遺跡もあることから、小宇のサガーニ帯が西銘村と考えられる。旧城の跡や牧場の伝承などと合わせ、サガイガー、カナギガー、ダーシガーなど豊富な湧水があったことは、西銘村の存在をうかがう大事な決め手と考える。

(2) おわて村とかたて村

「おわて」と「かたて」という言葉の意味を知るためには、「西銘間切」の村々が現在の飛

鳥御嶽を中心にして東西南北に広がっていた、このことを前提にする必要がある。「かたて」は「かた」と「て」がつながった言葉との仮説を立てて検討してみよう。まず「て」とは何か。長間村の村立に関する「宮古島往復文書」（『多良間村史』4巻1993）によれば、「山川之儀^{そまやまどてうち} 土手内^{ごさそうろう}ニて御座候」とある。土手とは、土を小高く積み上げた堤^{つつみ}、敵の侵入を防ぐため、城の周りに設けた土の堤と辞典に書かれている。どうやら^{そまやま}土手内が、問題を解くカギになりそうである。「て」を土手と考えれば、飛鳥御嶽の西には西銘村があり、その片方の東には土山土手があり、山川方面が「かたて村」ではなかろうか。飛鳥御嶽と「きやけ村」の真中の村となる。命の水は山川ウプカーという豊富な湧水からいただける。

「おわ」については「^{おわ}被われる」又は「上の土手、うわて、上手」と考えられるので、飛鳥御嶽の玄関から前方あたりの増原、瓦原あたりとなる。命の水はシューガカー、ザウカニガー、ナカヤカー、プース[°] ガーなどの豊富な湧水からいただける。

(3) いこむ村

飛鳥御嶽から南の方向に、いこむ村の名残りと考えられる地名がある。イクンバリというところだ。宮積と宮原小との中間地点で、ブンミヤ屋敷跡もある。その東寄りには古い屋敷跡があり、ここもイクンバリと呼ばれている。この地域は、更竹病院など高いところから眺めると、丘陵地^{きゅうりょうち}や里山^{さとやま}に囲まれた所である。里山が囲む村、すなわち「囲む村」と書いて「いこむ村」読むことができる。このイコム村は、長い間廃村に追い込まれ、明治の中頃に集落が再建された時、イクンバリと呼ばれたのではないか。ブンミヤ・村番所が設置されたため、古層^{こそう}の村「いこむ村」の名が「村」から「原」に変化し、よみがえったと考えられる。命の水はスナバタを流れる小川から、いくらでも汲み取ることができる。

(4) きやけ村

1725年に始まった長間村の村立てが、マラリアのため困難を極め、山川、屋敷原^{やしきばる}、大瀬原^{うぶしばる}と移転を余儀なくされ、1813年に定住した場所が喜屋慶^{きやけ}地方となったと旧記は語る。喜屋慶とはキヤギ木のことで、イヌマキともいう高級木材であるため、喜び慶賀で、めでたい家屋の漢字があてられたと考える。西城中学校の裏山はキヤギ嶺があり、周辺の集落はキヤギと呼ばれている。（長間村は明治40年まで平良間切に含まれていた）。

榎木^{かし}（キヤギ・イヌマキ）や福木は、各地の御嶽などでも生育している在来木であり、14世紀半ばにキヤギ嶺があっても不思議ではない。喜屋慶地方とは、キヤギの里から忠導氏友利主を祀った長間御嶽の周辺までを指していたと考える。

1-5 白川浜の決闘とその後の西銘村

『宮古島記事仕次』によれば、勢力を拡大してきた「西銘間切」(大きな村)は、飛鳥翁がウキミゾラに討たれて亡くなってから、滅亡したことになっている。そのあらすじは次のようである(『記事仕次』1748)。

西銘村の西隣の石原村があり、その村の主・思千代按司は自分の領土が侵略されるのではないかと恐れていた。弓矢の達人ウキミゾラに3頭の屋籠牛を報恩として差し上げるので、飛鳥翁を打ち殺してくれと頼む。「屋籠牛とは今の犁牛を屋の中に置能飼込肥す候」。ウキミゾラは飛鳥翁ほどの勇士を討ち取るのに、屋籠牛3頭は不足だから5頭にせよと言って引き受ける。このようにして、あの有名な伝説「白川浜の決闘」が展開されたのである。

この物語は、映画をみるような実に写実的な書き方・描写で、『平家物語』に似ていると評価されている。場面は白川浜、ウキミゾラが飛鳥翁に弓矢の決闘を申し入れる。飛鳥翁はウキミゾラが弓術の名手であることをかつて聞き及んでおり、良き相手と喜び「それでは50歩の先に的を立て、一矢つつ試ん」と答える。ウキミゾラは「この浜に身の長け穴を掘り、首ばかりを出し、頭上に一寸のしるしを挟み、それにあたるを勝ちとしよう」言い返す。飛鳥翁はそれが「はかりごと」とは夢にも知らず。二人は50歩離れて穴を掘り首を出す。飛鳥翁は約束どおり「身の長け穴を掘り首を出す」。ところが、ウキミゾラは約束を守らず「ひざを曲げて首が出るように掘る」。両者とも名射手である。勝負は身体の動きがままならない深い穴を掘った飛鳥翁の負けとなった。

平家物語を良く勉強したうえで、それを参考にまとめたと思われる『記事仕次』は、その場面を次のように語る。「ウキミゾラ、大の狩侯(二股の矢)をつかい、十分引き絞って、ひやうと発つ。あわれむべし、その矢あやまたず、飛鳥翁の両眼を射貫く。飛鳥翁あつとさけび、穴よりおどり出る時、今一矢胸にくさっと立つ。急所の痛手なれば、飛鳥翁、嗔怒を発し、50歩を一躍に飛んでウキミゾラをつかみ殺さんとす。ウキミゾラも聞ゆるはやわざの名人なれば、十隻ばかり伏せ置たる舟の中に這入て是を避く。飛鳥翁、その舟八九までは、はねかえし捜しとも、矢の傷しきりに痛んで堪えかねて、力なく西銘の方へ一陣の風の通るように音して飛び帰る。その日の暮れほどに、むなしく亡くなりしとなん」。

飛鳥翁の死亡は石原城主・思千代按司の下女「さらもい」によっても確認された。嘆き悲しむ声が記録されている。「この西銘西銘や、このおわておわてや、飛鳥翁舞鳥かゆへんと村立や 群立やおたらめ、けふ失ぬあちゃや失ぬ しらずとて」(西銘村やおわて村、飛鳥翁がいなくなれば、村立や群立は望めない。今日もない、明日もない。もうわからない)。

この記録が基になって、西銘村は滅亡したことになっている。これについては立ち止まって考えてみる必要がある。まず、飛鳥翁とウキミゾラの白川浜決闘は、按司と按司の領土争

いが原因である。勝ち組の石原城主・思千代按司が西銘村をそのまま廃村にして置くのだろうか。負けた西銘按司からすれば廃村となるが、勝ち組からすれば新しい領土なる。記録にはないが当然の結果である。『記事仕次』によれば石原城主とウキミゾラは、間もなくして飛鳥爺の従弟糸数按司によって滅ぼされる。目黒盛の幼少期だから1390年代の頃である。

按司たちの領土をめぐる争の中で、見落とせない記録がある。大野山林内、現在の市営植物園の北側の畑についてである。按司時代に初めて大野山林内の土地を開墾し、畑を作った人は、炭焼太良の長女ウモイメガとその夫・根間の犬氏である。この土地は「いもひげもり」と呼ばれ、肥沃で極上の優良地であった。根間の犬氏は息子の目黒盛が大きくなったら、この土地を譲る予定であった。飛鳥爺の従弟糸数按司と話し合い、息子が大きくなったら返すことを条件に、この優良地を糸数按司に預けた。目黒盛は大きくなってから、川満村の叔母からその話を聞き、親の土地を返してほしいと糸数按司に申し入れる。ところが、肥沃な畑だったことから、なかなか返してくれない。あげくの果ては目黒盛を亡き者にしようと、あの手この手の策略が企てられた。糸数按司の側近7兄弟と戦いもそのひとつである。戦いの場所は稲葉嶺(市営植物園内の嶺)で、結果は目黒盛の勝ちとなり、大野山林内の土地は目黒盛のものとなった。

大野山林内の畑の持ち主の動きは、「白川浜の決闘」後の西銘村を考えるうえで重要である。当時の按司は百姓をまとめて指導する役割があり、畑の耕作は百姓の仕事で、周辺には村落が作られていたと考える。したがって、大野山林内の畑の所有権は、根間の犬氏から糸数按司、そして目黒盛という順序で引き継がれたことになる。忠導氏の元祖、西銘按司に敵対する勢力は早々と滅ぼされており、忠導氏の一門が身近なところにいたことになる。

西銘主(炭焼太良)から約100後の1500年代には、仲宗根豊見親が長間田を莊園として使っている。莊園の耕作には名子があてられ、長間田の近くに百姓村が作られたであろう。山川、隅原、屋敷原あたりは、仲宗根豊見親時代に村落として再建されたのではなかろうか。

1-6 廃村の長期化とマラリア

これまで西銘村と関係した伝承として、1350年頃の炭焼太良の物語、飛鳥爺の西銘間切5ヵ村、1390年頃の目黒盛豊見親と大野山林内の優良農地、1500年代の仲宗根豊見親の莊園・長間田の開墾などを取り上げてみた。飛鳥爺が亡くなった後も、目黒盛豊見親や仲宗根豊見親の田畑が西銘村にあったことから、一部の村は再建されと考られる。しかし長くは続いていない。1600年代には西銘村に関する記録が見当たらない。1725年になって西銘村と飛鳥城に関する記録がみられるようになる。首里王府の正史『球陽』には「西銘邑だんだん衰退し、ついに荒野となる。近世に至り、飛鳥の怨恨は猶遺在するが如くして、他の田圃を耕す

人、しばしば疾病に染みて、にわかには斃死すること有り。この故に邑人、この地を往来するに、必ず祭品を備へ、飛鳥城を拝謁してもって弔祭を為す。この年に至り、その旧城の下に王命を請乞して長間邑を建設す」(尚敬王 13 年条)。

この文書では、死に至る飛鳥怨念の病とは何なのかは解らないが、その頃、飛鳥の怨念を鎮めるため、祭祀が行われたことが明らかにされている。弔祭は飛鳥城となっているから、旧城とは疑いもなく飛鳥城となる。「旧城の下に長間邑を建設す」と記録されているが「旧城の下」とはどこか。広く屋敷原辺りまでと見るか、あるいは飛鳥城と直接つながる山川あたりとするか、検討の余地を残すものの、ここでは山川方面として理解しておきたい。この一帯は、飛鳥翁時代の西銘間切に属する「かたて村やきやけ村」と関わる場所であるが、在番の時代に入り、平良間切の長間村として村立てされた所である。

次は長間村を再建するにあたっての記録である。ここでは、村立てが王府の認可によって行われるので、王府の正史『球陽』にそって経過を追ってみたい。

○1731 年 尚敬 19 年条、1725 年に大神島から 72 名を長間の地に移転させたが、この漁民たちは田畑になじまず、飲食を欠く有様だった。それで他の村から 200 名余を集めて「亦此の村に移住し、与人や目差を設置した」。これだけでは理解に苦しむので、稲村の「『庶民史』で補足したい。最初に大神から 72 名を山川の地移転させたが、成功しなかった。それで次に久松、狩俣、東川根、池間から 200 名を屋敷原に移住させ、村番所も設置し、与人や目差の役人も配置したということである。

○1814 年 尚灝王 9 年条、長間村を喜屋慶地方に移す。理由は湿地帯が要因となり熱病に染む者多し。住む人も減少し村立て難し。「百姓たち皆呈して前み来り」、喜屋慶への移転の申し出もあり、認められたと記されている。長間村の村立てが困難を極めたのは、熱病・マラリアが原因だったのである。

以上のようにマラリア感染による長間村立ての困難さは、飛鳥御嶽の前方や西側、つまり近年の山北の村立ての困難さを意味する。しかも、この地域を長期的に荒廃させ、明治、大正、昭和と山北・宮原の発展を妨げた大きな要因となった。その後の経緯を調べてみた。

1813 年 喜屋慶地方にへ移動

「西銘間切」の 5 つの村は「きやけ村」だけで残ったことになる。

1905(明治 38)年 細竹分教場は大雨の際、川留のため児童の通学に妨げある集落を有す。

又、校下多少の風土病間けつ熱マラリアがあるため、出席率は悪い。細竹分教場の校区は、東仲宗根添の細竹最寄、山北最寄 西里村盛加最寄、西里村野原越最寄(山口源七「与が眼底に映せる宮古郡の教育」)

注・川留のため児童の通学に妨げある集落とは山北のこと。当時は現宮原小学校裏のスナ端に橋は無く、大雨の時は渡れなかった。本格的な橋の工事は大正13年。

1918(大正7)年 昨年以来マラリア病並びに世界感冒激烈なり欠席児童多し 『松林尋常小学校沿革史』

宮古島のマラリア発病者(ひ臓の腫れ)

1927(昭和2)年

宮古島全体	字長間	字東仲宗根添	字川満	字比嘉	字嘉手苅	字上地
878人	167人	136人	125人	94人	65人	64人

年度別マラリア発病者数

	昭和2年	昭和8年	昭和14年	昭和28年	昭和30年	昭和36年
宮古島全体	1510	271	1451	50	12	マラリア
字東仲宗根添	136	17	173	15	10	撲滅宣言

資料：宮古保健所、広報みやはら

マラリア感染症の環境的要因

- ①山北(宮原)は水源流域である。崎原靖氏の「土地整理事業地カランク付調査は貴重資料。
- ②山北(宮原)は佐和地、大野越、南増原、土底など湿地帯が多い。水田は44町歩あった。
- ③「泥岩層に覆われ、断層地形の影響で窪地が多く、湿地が形成されやすい。」(崎浜2003)
- ④大野山林もマラリア媒介蚊・コガタハマダカラの繁殖地であった(仲松1977)。
- ⑤山北は湧水の多いところ。シューガカー、ザウカニガー、ナカヤガー、プーイガー、ザカガー、サーダガー、ツツプラガー、サガイガー、カナギガー、ウツマガー、フサガーなど。

1-7 山北村落(宮原)誕生の経緯

まず、宮原(旧山北)の歴史的経緯を振り返ってみたい。(ここでは宮原と高野を含めて山北と呼ぶことにする)。

1862(文久2)年 野原村が東仲宗根村^{もより}最寄土底を開拓「向えい氏家譜」『平良市史』

1862(文久2)年 友利村が東仲宗根村最寄佐和地を開拓「白川氏家譜」『平良市史』

1873(明治6)年 ○ドイツ商船ロベルトソン号宮国海岸で^{ざしやう}座礁、救助される。

○富川親方農務規模帳公布・その内容。奨励事項は粟、麦、稲、イモ等の栽培方法、禁止事項は瓦屋の禁止、百姓移転の制限・乗馬の禁止等。

1874(明治7)年 仲宗根村目差・忠導氏15世仲宗根玄教が「本村添村の未進石の解消」(添村の開拓・生産拡大)^{ほうしやう}で褒章「忠導氏家譜」『平良市史3』

1879(明治12)年 ○明治政府、琉球藩を廃し沖縄県設置を公布する(宮古島市史1)。

○宮古・八重山の在番廃止、蔵元は存続する(宮古島市史 1)。

1880(明治 13)年 ○宮古島役所を蔵元に設置する(宮古島市史 1)。

1888(明治 21)年 ○甘蔗栽培制限令廃止される(宮古島市史 1)。

注：山北に村番所(支所)も設置され、各里の原型がつくられた頃ではないか。

1893(明治 26)年 ○人頭税廃止の国会請願。

○山北の総代シューは、北増原下地家の祖父と伝えられている。

奈良原知事「名子、宿引女の廃止」を内訓『平良市史 1』

1894(明治 27)年 鏡原馬場での祝宴 『平良市史 1』

この頃から宮古島のさとうきび大幅増産

明治 23 年	明治 25 年	明治 40 年	明治 44 年
243 トン	3128 トン	3 万 7 千トン	6 万 1 千トン

1895(明治 28 年) 細竹分教場設立 『鏡原小 60 周年記念誌』

「細竹最寄の西隣旧東仲宗根村事務所敷地内(村番所跡)に校舎を建てた」
(東仲村番所・支所は細竹より山北に移動していた。山北に村番所跡あり)
校区は、西里村最寄の盛加と野原越、東仲宗根村最寄の細竹、底原、山北
であった。「細竹分教場は大雨の際、川留めため児童の通学に妨げある部
落(山北)を有す。又多少の風土病間歇熱(マラリア)あり」(山口 1905)。

1897(明治 30)年 ○蔵元、村番所、名子の廃止(士族の騒動)

蔵元の 3 頭は 1 島司に改正、村番所の与人は村頭に改正

東仲宗根村の村頭は忠導氏 15 世仲宗根玄教(明治 31~41 年)

1898(明治 31)年 山北の小字、宮積、瓦原、土底、更竹、南増原、北増原、サガニ、スナ、
ムテヤ、佐和地、白川田、山川が土地台帳に記載(宮古島市税務課)

1899(明治 32)年 ○土地整理事業開始『平良市史 1』

1902(明治 35)年 市史編さん室所蔵の地籍図に登載された山北の御嶽(地番)

宮積ユーヌヌス御嶽(1623)、宮積ミドン御嶽(1629)、スナ御嶽(2947)、ス
ナ里御嶽(2321)、サガーニ御嶽(2822)、西銘御嶽(2672)、サガーニうぶ
御嶽(2741)、北増原ユーヌヌス御嶽(2524)、ンギヤ御嶽(2602)、北増原飛鳥
中通イ(2532)、飛鳥御嶽(2422)、天ヌマツガニ御嶽(2555)、クムイバリ
ンミ御嶽(2511)、スマグス御嶽(1848)、タッチ御嶽(1845)、土底ユーヌヌ
ス御嶽(1825)、ザラツキ御嶽(1909)、瓦原天の主御嶽(1959)、賀信家御嶽
(1981)、南増原カニヤンミ御嶽(2405)、西サーズー御嶽(3060)、サーダ
ガー御嶽(3134)以上 22 ヲ所。

1903(明治 36)年 ○人頭税廃止『平良市史 1』

山北の人口推定 664 名・159 世帯(士族 18 戸、平民 141 戸)。

(沖縄年県統計書 明治 36 年・東添より推計)

山北の水田 44 町歩、長間の水田 78 町歩、宮古全体では 330 町歩

(『宮古島市史』・明治 36 年土地整理事業)

山北の開墾された畑 150 町歩(崎浜「地力区分図」2010 より推計)

村・添村の面積 東仲宗根添(最寄)856 町歩 東仲宗根村 136 町歩、

西仲宗根村 420 町歩 (『沖縄県統計書』明治 36 年)

宮古全体、牛 4100 頭、馬 3765 頭 (『沖縄県統計書』明治 36 年)

山北に移籍した人の出身地、転籍時期は祖父母の若い時(明治 20~30 代)

世帯	出身地	祖父	父親	嫡子
IK 家	市内西里	明治 18 年生	明治 44 年生	昭和 8 年生
SA 家	東仲宗根	元治元年生	明治 23 年生	大正元年生
OR 家	仲保屋	明治 10 年代	明治 30 年代	大正 14 年生
NA 家	下里村	明治 8 年生	大正 2 年生	昭和 10 年生
NG 家	東仲宗根	慶応元年生	明治 28 年生	大正 10 年生
NI 家	久貝村	明治 17 年生	明治 30 年代	大正 15 年生
SI 家	下地村	明治 10 年代	明治 30 年代	大正 15 年生
SU 家	砂川村	明治 20 年代	明治 40 年代	昭和 9 年生
NE 家	西里村	慶応元年生	明治 27 年生	大正 8 年生
TO 家	西里村	安政 3 年生	明治 15 年生	大正 7 年生
IR 家	西城	明治 10 年代	明治 30 年代	昭和 7 年生

注 :除籍簿と聞き取り調査、上記 5 名の祖父は里御嶽創設にも関与。

1908(明治 41)年 字東仲宗根添誕生 特別町村制で平良、城辺、下地、伊良部の 4 村。

平良間切が平良村に、東仲宗根村は字東仲宗根に改正、東仲宗根村最寄は字東仲宗根添と改正され、行政区として独立した。

細竹分教場は明治 41 年 6 月、細竹から東仲宗根添 1531 番地に移転、翌年松林尋常小学校として独立した。松林校区の山北は水気が多く、マラリア感染で子どもたちの学業を遅らせた(『松林校沿革史』)。

以上の経過から山北村落の誕生は明らかである。明治に入る少し前の 1862 年、首里王府か

ら派遣された役人の命により、友利村や野原村が土底や佐和地を開墾している。西原村や福里村が村立された明治7年には、山北は開発途上である。当時は東仲宗根村の士族の家が、下男を山北に派遣して畑を開墾させている。士族の利害やマラリアの影響で、山北の村立はできてない。

山北には、ブンミヤ（村番所）跡が残されている。細竹から移されたと考えられる。時期としては確証が得られないので、1887(明治20)年頃と仮説を立てておきたい。山北には人頭税廃止運動に係った総代もいたと伝わっているから、明治25年頃には、少なくとも百姓が暮らしていたことになる。10年後に660名の人口を有したことから推測できる。

1898(明治31)年作成の土地台帳に山北の全ての小字が登載され、1902(明治35)年の平良字東仲宗根添の地籍図からは(ムテヤ、瓦原、更竹など消失)には、山北の里御嶽22か所が確認できる。1903(明治36)年には山北の人口が約160世帯の660名、耕作地150町歩うち水田44町歩などの状況が明らかである。

また、見落とすことができない大事な点は、佐和地と大野越(現在の高野一帯)の160~200町歩に及ぶ広大な土地が未開墾のまま置かれていたこと。湿地帯のためマラリアを媒介するコガタハマダラカとその幼虫ボーフラ繁殖し、この一帯の開発を妨げていたことである。

当時の山北のサトウキビ作付面積を知ることはできないが、島全体の生産量を取り上げてみると、倍々の伸び方である。明治26年に人頭税廃止運動は大きな高まりをみせているので、島のサトウキビの生産拡大と一致している。山北への転籍世帯の調査件数は少ないが、この調査でも各地域から転籍してきたことや、時期は明治20年から30年代となっていることが明らかになっている。

こうした動きは、人頭税廃止運動とともに換金作物サトウキビ生産への意欲に燃えた各地の人びとが、マラリア感染を警戒しながらも、広大な土地を求めて山北に移り住むようになり、本格的な集落形成と御嶽創設がされたことを物語っている。

サトウキビ生産意欲に燃えた山北の人々については、小祿恵良氏がまとめた『宮原自治会広報紙 みやはら』第3巻(宮原集会場落成記念特集)の「人物に見る宮原の歴史」に詳しく掲載されている。明治生まれでは、ムテヤの池間金戸野、スナの平良真津金・友利玄昌、増原の根間玄綱、宮積の長濱長二郎などである。(全員、村・町・市会議員に当選している)

第二章 宮原・高野の里と御嶽

2-1 里名の由来と里御嶽

現在の宮原は、明治から大正時代、そして1956(昭和31)年まで山北村落と呼ばれてきた。翌年、鏡原小学校山北分教場が小学校として独立したため、宮積「宮」と増原や瓦原の「原」

をとって宮原という学区名が付けられた。1961(昭和 36)年に水納島と大神島より 40 世帯の入植者により高野集落が誕生、宮原自治会とともに宮原小学校区域を構成してきた。宮原校区には、宮積、ムテヤ、スナ、佐和地、サガーニの里が 1 班となり、南増原、北増原が 2 班、瓦原、土底、更竹が 3 班をつくり、これに高野が加わっている。本節では里名の由来と御嶽について記述した。

(1) 宮積

宮古島市総合博物館から東に向かっては丘陵地^{きゅうりょうち}が横たわっている。高いところは高嶺御嶽で、海拔 75 メートルもある。この丘陵地のすぐ北側凹地の集落が宮積である。そこに住む人たちは里名を「ンメズン」と称している。丘陵地の嶺(方言はンミ)、嶺の隅(方言はスン)の地形から「ンミのスン」となり、なまって「ンメズン」と呼ばれたと考えられる。

宮積はイス°(西)の里とアガス°(東)の里からなっているが、大正時代までは西の方だけに住まいはあった。

宮積には 22 世帯があり、すべての世帯が御嶽の御願に参加している。神事はウサギサス 1 人とニス^ニのサトとアガス°のサトから輪番制で割り当てられたサス 2 名が担当している。参拝する御嶽は 5 か所である。①里の南の丘陵地^{きゅうりょうち}にある高嶺御嶽(ウプうたき)、②里の南側に位置するミドン御嶽(カニミガ御嶽)。ここは高嶺御嶽に鎮座^{ちんざ}する主神の妻の御嶽と言われている。③集落内にあるユヌヌス御嶽で、粟プース°豊年祭の時は、この御嶽でアンタリジューシーを炊き出して、豊年祭を催している。④集落内にあるカッチャー御嶽。鍛冶の神を祀っている。⑤里の北側にはンメズン御嶽(マツカニ御嶽)がある。佐久田家と伊波家が創建した御嶽であるが、今では里全体で参拝している。ここは霊光^{れいこう}が輝きを放ったところで、神が天降りしたと受け止め、天からの神・テンノマツカニを主神として祀り拝んでいる。御嶽の創設は②と③の御嶽は明治 35 年以前で、⑤の御嶽は明治 35 年以降である。年間祭祀は 10 回である。宮積の里御嶽写真は 43 頁掲載。

(2) ムテヤ

ムテヤは元屋のことである。古層の村と考えられる元屋とは、どのようなものだったのか。宮積とムテヤのちょうど真ん中あたりに、「イクンバリ」と呼ばれた場所がある。ブンミャー跡もある。この「イクンバリ」は宮原小学校の前から西瓦原の前方までの範囲に及んでいたとみられる。昭和 11 年に瓦原から現在のムテヤに移転してきた伊良部ミヨさんの父・松は、移転地をイクンバリと認識していたこと。また、下里定徳さの祖母が誕生したのは、ブンミャー跡の東方面で、古い屋敷跡も確認できるどころ。ここもイクンバリといわれている。西

瓦原の南前方、ツツブラ嶺の北側もイクンバリと呼ばれ、粟も育たぬやせ地だったといい伝えられている。イクンバリと呼ばれた区域は里山で囲まれた位置にある。つまり里山が「囲む村」が「囲(イ)コム村」である。いこむ村は按司時代に全盛を誇った「西銘間切」の5つの村の1つである。その名残りが「イクンバリ」であり、その一画が現在のムテヤだと考えられる。

ムテヤの里は、戦前は現在地より西側にあったが、現在は小学校の近くに移動してきている。世帯は10世帯があり、9世帯が御嶽願いに参加している。神事はウサギサスと輪番制^{りんばんせい}で割り当てられたサスが担っている。参拝する御嶽は5か所で、①南の丘陵地にある高嶺御嶽(ウブ御嶽)で、ここは宮積、細竹、野原越とともに祈願している。②佐和地にあるサーズー御嶽で、西銘御嶽や飛鳥御嶽の中通イともいわれている。③里の南に位置するンメズン御嶽(マツカニ)は宮積の里人とともに祈願をしている。④里のユース御嶽であるムテヤ御嶽。以前はこの御嶽で皿びゃーすアグ(長浜1979)を歌い、豊年祭を祝った。⑤鍛冶の神を祀ったカッチャー御嶽。ここでは旧暦の11月8日にフーツキョーカ祭が行われる。御嶽創設の時期は、明治35年の地籍図が消失したため解らない。しかし残された他の里の地籍図から類推すれば、明治35年以前と考えられる。古井戸は2か所で、戦時中に朝鮮からつれてきた軍夫に掘削させた井戸を伊良部ガーと呼び、里の西の方にある古井戸をムテヤガーと呼んでいる。ユースタミ・シツの祭祀に、井戸の神に線香を焚き感謝をしている。年間祭祀は宮積と同じく10回である。ムテヤ里御嶽の写真は44頁掲載。

(3) スナ

スナという里名の由来は、まだ明らかではないが、砂川間切の人たちが佐和地開拓にきて、傾斜地の現在のスナに住んだことが関係しているように考えられる。

つまり、砂川間切、友利村の人たちが、明治に入る6年前に佐和地の開墾のためにやってきた。佐和地は湿地帯であるため、開墾者たちは小高い場所に畑(原)番屋をつくり暮らした(島尻1989)。砂川間切から来た人たちが住んでいた場所を示すために、「砂川間切」の「砂」の一字を当てたのではないだろうか。スナの呼び名は、明らかに大和風である。

1902(明治35)年の土地整理事業時に作製された土地台帳と地籍図に関する貴重な報告書がある(崎原靖、2003)。それによれば、字スナの地目別土地筆数は合計204筆で、土地所有者は40人である。ところが、すべて所有者の住所は、現在使われている宅地の地番ではない。土地整理事業以前に付されていた家の番号である。具体的事例でみると「平良某」は、平良間切東仲宗根村496番地である。その後山北に移転するが、住所は平良間切東仲宗根添村496番地となっている。土地整理事業で付された宅地の地番に変更されるのは、明治38年以降で

ある。

現在スナ里の世帯は20戸である。そのうち11世帯が常時御嶽願いに参加している。神事を担当するのはサスで、マイバラサトとシンバラサトからそれぞれ一人、輪番制で割り当てている。任期は1年である。スナの御嶽は①里の東側にあるサトウタキ。ここは西銘主と飛鳥翁の中通イ御嶽になっている。②宮原公民館隣のスナ御嶽(天ヌマツガニ御嶽)、③サガーニ里の前にあるサガーニ御嶽、④集落内にあるカッチャー御嶽の4カ所である。御嶽創設は地籍図(明治35年)により、①、②と③の御嶽が明治35年以前である。古井戸は大正12年開さくされた里のカーがある。年間の御嶽祭祀は6回である。省略した祭祀は廃止したのではなく、ユースタミ願いの時、併せて捧げている。スナ里御嶽の写真は45に掲載。

(4) サガーニ

サガーニの里は、西銘城跡とのつながりをもつサガーニ遺跡の周辺集落である。宮原では古層の村といえる。キスガー付近に多くの屋敷跡があり、復帰前まで残されていた。里名の由来は、坂道の嶺につくられた集落であるため、サガイ(下る)とンミ(嶺)をあわせた言葉、サガイ・ンミが語源であり、嶺(ンミ)からミニに訛ってサガーニになったと考えられる。

西銘の主の井戸として、御嶽の北側にサガイガーがある。サガイガーは、下がったところの井戸という意味である。西銘城跡のある場所が、本来、北の嶺であるにもかかわらず、西銘と大きく変化している。これは、ニス(北を意味する方言)とンミ、(嶺)、合わせた「ニシンミ」が「ニシミ」となり、西銘という漢字が充てられたことによるものである。

このようにサガーニはサガイ・ンミがくずれた言葉であり、ニシミ(西銘)はニシ(北)のンミ(嶺)が訛った言葉である。

サガーニの世帯は5戸であるが、御嶽祭祀への参加は2世帯である。高齢化や施設入所のために、参拝者が少ない。里の御嶽は①サガーニ御嶽、②ウブ御嶽、③ニヌパ御嶽、④サーダーガ御嶽、カッチャー御嶽の5カ所である。地籍図によって①と②と③の御嶽は明治35年以前であることが確認できる。古井戸は現在の集落内にサガーニガーがあり、里の西側にはキスガーがある。この周辺にも多くの屋敷跡が本土復帰前までは見られた。戦前は、うりがーとして北海岸のカナギガーを利用していた。

神役はサス1人である。、年間の御嶽祭祀は粟プース[°]とユースタミ・シツの2回のみである。サスはフーツキヨーカを復活させたい意向である。サス夫婦が不思議なことに、同じ日に同じ夢、フーツキヨーカの夢を見たというのである。それは「フイゴの神に感謝を捧げるようにとのお告げ」であった。サガーニ里御嶽の写真は46頁に掲載。

(5) 佐和地

佐和地の里は現在2世帯である。この地域はもともと湿地帯で、田んぼもあり沢地(サワチ)であったことが語源になつている(小祿2000)。沢田川(サーダガー)やツブガーも佐和地に含まれている。この地域は大野越とともに平坦で、しかも広大な面積を有している。平良町制10周年記念誌には「この地域は排水不良のため常に湿潤^{しつじゆん}して、・・・降雨数日に涉れば付近の土地山林其の他より流入する雨水湛水として低地はあたかも池沼状態と化し、長く滞水するのを以って、マalaria病有毒蚊の発生する病原をなすもの」とある。この大野越の状況は、全く同様に佐和地にも当てはまるもので、農業振興や公衆衛生の上からも、この地域の排水路の整備は重要課題で、大正から戦前まで大掛かりな工事が行われた。

佐和地の里には2か所の御嶽がある。里の前方のサーズー御嶽は、モテヤの里御嶽として崇められている。佐和地から西へ約100mのところにもサーズ西御嶽があるが、ここも里人は参拝していない。古井戸は集落内にある。佐和地では現在、御嶽願いは行っていない。

(6) 南増原

増原は西銘主や飛鳥翁^{とびとりや}の住んでいた由緒ある場所^{ゆいしよ}で、「西銘間切」(大きな村)の拠点である。増原という地名は、西銘の主や飛鳥翁といった宮古島のすぐれた英雄がいたことを考慮すれば、優(マサ)る人のいた里、すなわちマサイ人の原(里)でマスパリとなる。また、海の幸にも恵まれ、湧水も豊富な土地環境からすれば、増さる土地(原)となり、増原と称されたとも考えられる。ここでは、マスパリの「マス」は、人も土地も両方と考えられる。

南増原の世帯は29世帯で、そのほとんどが御嶽願いに参加している。ウサギサスが高齢化し神事を司ることが困難になっているが、まだ後継ぎはみつからない。現在のところ神事は、サスと幹事が取り仕切っている。サスは2年の任期で、二人で担^{にな}っているが、1年ずらした形で選出されるため、2年目のサスが新米サスを指導し、祈願の仕方を伝承している。祭祀の経費は里の共有地の小作料でまかなっている。南増原の御嶽は、①真徳金を祀った飛鳥御嶽、②飛鳥翁の妻・オモウを祀るカニヤーンミ御嶽(ウヤンマ御嶽)、③テンノマツガニ御嶽、④クムイバリンミ御嶽(大和御嶽)、⑤カッチャー御嶽の5か所である。御嶽創設は飛鳥御嶽が1725年、地籍図により①、②、③と④は明治35年以前であることが確認できる。年間の御嶽祭祀は12回行われている。飛鳥翁の祖先である西銘主を敬う意味で、祭祀で一番大きい栗プース[°]は西銘御嶽より1日遅れの日取りを取っている。シツ(節)祭祀には、飛鳥翁のカー・湧水(シューガカー)、大正12年開削の古井戸に、線香と供物を捧げている。

なお、飛鳥御嶽の神への中通イ御嶽^{ようはいしよ}(遥拝所)は次の通りである(『平良市史』9巻)。

①宮積・ウブ御嶽、②ムテヤ・サーズー御嶽、③スナ・サト御嶽、④サガーニ・ウブ御嶽、

⑤北増原・飛鳥中通イ御嶽、⑥瓦原・タカ御嶽、⑦土底・ウブ御嶽、⑧更竹・ザラツキ御嶽、⑨高野・高野御嶽、⑩細竹・ウブ御嶽、⑪長南・ウブ御嶽、⑫長中・飛鳥御嶽、⑬山川・マラシ御嶽、⑭山田・サト御嶽、⑮屋敷原・天の主御嶽、⑯添道・前福元御嶽・⑰アダングキ元御嶽・⑱添道飛鳥御嶽、⑲中添道御嶽、⑳市街地西里・ミフツカン飛鳥主御嶽、㉑スムヤ一御嶽、㉒東仲・イザガ御嶽、㉓西仲・フサティ御嶽、㉔西仲ミーヌ御嶽、㉕荷川取・パスタ御嶽、㉖下地上地・里御嶽、㉗与那覇・ツキンヤ一御嶽、㉘福里・イラウピヤース[°]御嶽
(御嶽写真は 47 頁掲載)

(7) 北増原

北増原の西銘御嶽に祀られた炭焼太良は、後の嘉播の親である。西銘御嶽は 1971 (昭和 46) 年にコンクリートで、祠^{ほこら}と鳥居、参道が改修された。その時に西銘城跡を囲んでいた石垣の大半が、建築資材として投入された。城跡の規模は約 15 アールである。表面採取で土器や陶器が見つかっている。石塚もみられるが、本格的な調査はまだ行われていない。

現在、北増原には 28 世帯が住んでいる。そのほとんどが御嶽願いに参加している。祭祀組織は幹事のもとにウサギサスがおり、マイバラの里とシバラの里から各一組の夫婦がサスを務め、皿の主も加わり計 7 名である。経費は各世帯から徴収し、線香や供物はサスがまとめて準備している。北増原の最大の祭祀は、アワプーズ・豊年祭である。この祭りは飛鳥御嶽に先んじて行われ、手作りの御神酒が神にささげられる。また、里の住民以外にも池間島や市街地からの参拝客も訪ねてくる。そのため 100 名分のご馳走がサスの家で準備される。

御嶽は①炭焼太良^{たる かま}(嘉播の親)を祀った西銘御嶽、②ンギヤ御嶽と呼ばれたところ。記録には竜宮御嶽ともある(平良市史 御嶽編 1994)、③ユースヌス御嶽、④飛鳥翁の中通イ御嶽(シューガヤヌス御嶽)、⑤カッチャ一御嶽の 5 か所である。地籍図から①、②、③、④の御嶽が明治 35 年以前であると確認できる。西銘御嶽の創設については、飛鳥御嶽に弔祭がされた 1725 年のほぼ同じころと考えられる。年間の御嶽願いは 10 回である。古い井戸は 1 か所である。北海岸付近のダーシガーも利用していたと言われている。写真は 48 頁。

(8) 瓦原

カワラという名称については、稲村恵敷^{いなむらけんぶ}の倭寇研究(1957)に取り上げられ、倭寇^{とうりょう}の頭領とのみなされてきた。上野のガーラバリ御嶽も倭寇との関係が指摘されている。ところが宮原の瓦原のカワラは、地形からきた地名と考えられる。ロシアの学者ニコライ・ネフスキーが著した宮古方言辞典(2005)には、カワラ(kawa:ra)は川原と訳されている。八重山でもカワラは川のことを意味した言葉である。瓦原の里を航空写真で見ると、裏には山田づぼからアラ

アキ(荒開)バダを通り、フサガー(クチャガー)の方向に小川が流れている。また、瓦原の前方には土底ガーから宮原小裏に流れる小川がある。つまり、瓦原の里は、前方と後方を流れる小川に囲まれており、地形的には川原の里になっている。カワラバリが瓦という漢字があてられたため、本来の川原が瓦原になったと考えられる。

村番所が置かれた明治30年頃までには、首里王府より公布された「規模帳」により、住宅の大きさや材料が定められていた。「蔵元庁舎や祥雲寺・村番所・ブンミヤーなど公共施設以外の家屋はすべて瓦葺きは禁止で、役人や士族といえども百姓同様に、その住居家屋は全て茅葺であった」(『宮古島市史』第一巻)。このことから瓦原という地名は古い呼び名ではなく、明治30年頃につけられたものと考えられる。

瓦原の里には24世帯があり、そのうちの20世帯が御嶽願いに参加している。神事は東と西の里から選ばれたサスが担当している。祭祀経費は各世帯から徴収している。瓦原の御嶽は①ユヌス御嶽、②天のシュウ御嶽、③ニヌバ御嶽、④タカ御嶽、⑤中通イ御嶽、⑥カッチャー御嶽がある。瓦原の古い地籍図で②と⑤が明治35年以前であると確認できる。この里はサス2人が神役として務めを果たしている。古井戸はプーイガーと戦後まもなく開削した井戸がある。年間の祭祀は3回である。瓦原御嶽の写真は50頁に掲載。

(9) 土底

更竹病院のあるザラツキ嶺の標高は88.8mで、ここより北西に位置する宮原の土底は、標高約40mである。ザラツキ嶺より50mほど低いところである。戦前、戦後と水田がみられたところである。土の底の里というのは、地下をイメージし尋常ではない。宮原には低地を示す地名として、佐和地(沢地)に沢田川、東底原、白川田、山川がある。

土の底とは一体どんなものか。考えられるのは、山崩れやがけ崩れによって地下の土層が表に現れることである。1771年、明和の大津波では、宮古・八重山で約1万2千人もの人が命を失った。この大地震はマグニチュード7.4と記録されており、津波とともに山崩れが起きたことは疑いもない。現在、土底山を「宮古の里」の方から眺めると、山崩れの痕跡を確認できる。近づいて見ると、赤土の下にあるべきクチャ・粘土層が、表面に現れている。地震が招いた可能性が高い。そうだとすれば、土底という地名は、地震という災害の痕跡を示す地名となる。

土底という地名は、今から153年前、明治以前に名づけられている。「1862(同治元)年、嵩原里之子親雲上の指導により、野原村が土底に田んぼを開き稲を栽培した」(向えい氏家譜)。上野・野原村といえ、宮古島で一番高いところの集落である。野原村の人たちは、クチャ、粘土層が露出した低地帯をみて、土の底を感じたのかも知れない。

土底の里の世帯は11世帯で、御嶽願いには常時8世帯が参加している。祭祀の経費は各世帯から徴収している。里の御嶽は、①飛鳥翁の中通イになるウブ御嶽、②子宝の神を祀るタッチ(立石)御嶽、③スマグス御嶽、④ナゴース御嶽、⑤ユヌヌス御嶽、⑥カッチャー御嶽の6か所である。地籍図により②、③、⑤の御嶽は明治35年には創設されていたことが明らかになっている。その中のタッチ(立石)御嶽については、「宮古島郷土史考 第三部」(砂川明芳1984)にくわしく記録されている。これによれば、タッチ御嶽の3つの御神体石は性神であり、城辺東底原のビマル御嶽に鎮座する「子授け神」とのつながりを示唆している。現在は里人の参拝はみられないが、土底井戸から東側にある「アラマラおたけ」の性神についても記録している。幼児の高さほどの御神体の立石と、すぐそばを流れる小川、それに近くの泉から間欠的に湧き出る「聖水」、この3つの結びつきがリアルに解説されて興味深い。

古井戸としては、土底ガーがある。開削は戦前で戦時中は日本軍に使われている。ウリガーとしては、水量豊富なザカガーの水を利用していた。ザカガーの水の神はウブ御嶽に祀られている。土底御嶽の写真は50頁に掲載。

(10) 更竹

宮原の更竹の里は、更竹病院の北側に位置する集落である。更竹の由来は、更竹病院の東に連なる丘陵のザラツキ嶺である。そこは按司時代に牧場として牛馬が飼われていた所、今は牧の頭(マキノツツ)遺跡になっている。昔の牧場の跡がザラツキ嶺と呼ばれ、1595年頃は座良村嶺と記録されている。ザラツキとは馬具の名前である。馬に鞍をつける時に、ズウガキ(尻繫)をかける。この尻繫の綱に10センチ程度の竹筒を通し、馬の背中や尻にかすり傷が生じないように工夫した馬具である。「馬が馬車を曳いて歩くときザラザラとなるので、この防具は「ザラツキ」と呼ばれた。牧の頭遺跡の前には豊富な湧水「前井」があり、また、漲水(蔵元)への道路も開かれ、多くの馬車の往来があったことから、この一帯はザラツキ嶺と呼ばれた」(宮国1976)。

ところで、ザラツキという馬具のルーツは、5世紀に朝鮮の新羅から日本に持ち込まれた雲珠(うず)ではないと考えられる。当時の雲珠は、支配者の権威の象徴、ステイタス・シンボルであり、金銀でこしらえた絢爛豪華な飾り物であった(九州国立博物館所蔵)。

ザラツキ嶺の周辺には、宮原の更竹(ザラツキ)のほか、城辺長間の西更竹、城辺西里添の更竹、砂川下里添の東更竹、西更竹と5か所の小字(集落)がある。

宮原の更竹の里には7世帯があり、御嶽願いには2世帯しか参加していない。ウサギサスが祭祀を担っているが、高齢化と施設入所などで参拝者は少ない。里御嶽は①ザラツキ御嶽、②ナゴース御嶽、③カッチャー御嶽の3か所である。①は明治35年以前の創設である。年間

祭祀は6回行われている。古井戸は集落内に開さくされているが、時期は不明である。更竹御嶽の写真は51頁に掲載。

(11) 高野

1961(昭和36)年に水納島と大神島からの入植者40世帯によってつくられた集落が高野である。この一帯の小字は東底原で、通称は大野越と呼ばれているが、本来の呼び名はウプニグスである。大きな背骨と腰を意味する。宮古島の古い地図「正保国絵図」(1649)には、大野越付近に森林が描かれ、島の背腰が感じられる。広大な山林と命の水を供給する白川水源は、誰もが知る宮古島の貴重な財産で、島全体の自然環境に及ぼす影響が大きい。

按司時代の頃、大野山林内には肥沃で極上の畑があったと伝承されている(記事仕次)。山林内の小高いところが稲葉嶺(市営植物園内の嶺)で、その東北にイナビゲモリという肥沃な畑があった。父親の畑を取り戻すために目黒盛が活躍した歴史的舞台でもある。

大野越は佐和地と同じように湿地帯のため、開墾が遅れマラリア感染にも苦しめられてきた。そのため、町(市)をあげての排水路工事が、昭和の初めごろから始まった。1961年に高野集落が誕生し、灌がい排水や区画整理、農道などが整備されてきた。この地域の畑の土壌中には、石ころやサンゴ石灰岩が無く、豊富な赤土に恵まれている。

高野の祭祀組織は、大神島と水納島に分かれている。高野居住者だけでなく、分家して他の地域に住む子や孫も祈願に参加している。高野の御嶽は、①高野御嶽、②大神中通イ御嶽、③水納中通イ御嶽、④水源地御嶽の4か所である。御嶽創設は1961年である。大神出身者は、ウサギサスを抽選で選び祭祀を行っている。水納出身者は、ツカサや二才頭そしてサスなどが神役となり「スツウプナカ(節の豊年祈願祭)」などを受け継いでいる。この祭祀を始めた「うえぐすく金殿は、鍛冶神で日本から渡来した人、カマ、ヘラ、スキなどの農機具を作って百姓に分け与えたので、農業神として祀られるようになった」(稲村1972)。多良間村では、旧暦11月7日から10日にかけてフィゴ祭が行われていた。この祭りで歌われた「鍛冶神のニリ」の中には、鍛冶神が大和から来たこと。フィゴなど鍛冶の道具を使って、長さ1尺、幅4寸のヘラをつくり広めたことが紹介されている。本土から渡来したとみられる鍛冶職人・炭焼太良を祀る西銘御嶽の近くの高野御嶽で、「うえぐすく金殿」を崇めるスツウプナカ祭が行われることは、不思議なめぐり合わせである。(高野御嶽の写真は52頁)

2-2 宮原・高野御嶽と祭祀

(1) 宮原の御嶽の一覧

里名	御嶽名	箇所
宮積	①ウプ御嶽 12 柱(テンヌマツガニ神、飛鳥爺の神、西銘主の神、炭焼タルの神、ツノジの神、シマヌパユヌヌスの神、水の主など)、ナーバイ、男性・カンドヌ、②ミドン御嶽 1 柱(テンヌマツガニ神の妻カニミガの神)、③ユヌヌス御嶽 13 柱、④シメズン御嶽 12 柱(マツガニの神)、ナーバイ、男性・マツガニ、⑤カッチャー御嶽 1 柱(鍛冶の神)	5
ムテヤ	①ウプ御嶽 12 柱(上記のとおり)、②サーズー御嶽 8 柱(中通ィうたき・飛鳥爺の神、西銘主の神、炭焼タルの神、)、③シメズン御嶽 12 柱(マツカニの神)、④ムテヤ御嶽(ユヌヌス御嶽) 8 柱、⑤カッチャー御嶽 1 柱(鍛冶の神)	5
スナ	①サト御嶽 7 柱(中通ィ、飛鳥爺の神、西銘主の神、炭焼タルの神、)、②スナ御嶽 5 柱(天のマツガニの神)ナーバイ、男マツガニ、女マツ、③サガーニ御嶽 5 柱、④カッチャー御嶽 1 柱(鍛冶の神)	4
サガーニ	①サガーニ御嶽 4 柱、②ウプ御嶽 7 柱(飛鳥爺の神、西銘主の神、炭焼タルの神)、③ニヌバ御嶽 4 柱、④サーダガー御嶽 1 柱 ⑤カッチャー御嶽 1 柱(鍛冶の神)	5
南増原	①飛鳥御嶽 6 柱(本殿トビトリヤ神、本殿西側に水の神、本殿東、竜宮の神、西銘主)、②カニヤーンミ御嶽 4 柱(ウミトウヤンマ神・オモフウヤンマ神、ツノジの神、水の主、竜宮の神)、ナーバイ女性・ウミト、③クモス° バリンミ御嶽 4 柱(ヤマト神、子授けの神、)、ナーバイ男性・ヤマ、女性・トガ、タマ、④テンノマツカニ御嶽 4 柱(天のマツガニ主が神、水の神、竜宮の神)、ナーバイ男性・マツガニ、女性・マツ、⑤カッチャー御嶽 1 柱(鍛冶の神)	5
北増原	①西銘御嶽 7 柱(スニヤキタル、モウシ)、②ンギャ御嶽 6 柱、③飛鳥中通ィ御嶽 7 柱(マツガニノ神・飛鳥爺)、ナーバイ男性・マツガニ、④ユヌヌス御嶽 9 柱(ユヌヌス神、ツノジ神)、⑤カッチャー御嶽 1 柱(カニシュー神)	5
瓦原	①ユヌヌス御嶽 3 柱(ユヌヌス神)、ナーバイ男性・ユヌス、②テンヌシュー御嶽 4 柱(テンヌシューノ神)、ナーバイ男性・マツガニ、③タカ	6

瓦原	御嶽3柱(マトフガニノ神、ヤマト神、水の神) ナーバイ男性・マトカニ、 ④ニヌパ御嶽1柱(ニヌパンマティダ神)、⑤賀信家御嶽1柱、⑥カッチャー御嶽1柱(鍛冶の神)	
土底	①ウブ御嶽5柱(飛鳥中通イ、飛鳥真徳金の神、竜宮の神、シマヌパモトガーノ神、ザカガーヌ神)、ナーバイ男性・マトフガニ、②タッチ御嶽3柱(テンヌシューマツガニ神、フツファナス神)、ナーバイ男性・マツガニ、③スマグス御嶽2柱(トナシューガ神、カーミンマガ神)、ナーバイ男性トナ、女性カーミ、④ユースヌス御嶽3柱(ユースヌス神、ツズジ神) ナーバイ男性・ユヌス、⑤ナゴース御嶽2柱(ナゴースカンドヌ神)、⑥カッチャー御嶽1柱(鍛冶の神)	6
更竹	①ザラツキ御嶽9柱(飛鳥中通イ)、②ナゴース御嶽2柱(ナゴースカンドヌ神)、ナーバイ男性・カンドヌ、③カッチャー御嶽1柱	3
高野	①高野御嶽5柱(パカヤヌス、飛鳥主、ズトース神、ミズヌヌス、リュウグウヌス)、②大神中通イ御嶽3柱(ウブ御嶽祭神スマヌヌス、ユースヌ神、ミズヌ神)、③水納中通イ御嶽4柱(ミンヌペーユヌシ神、ナカドゥイヌ神、ミズヌヌス、リュウグウヌス)、 ④水源地御嶽1柱(水の神)	4
	合計 48-4(重複)=44 か所	44

上記の御嶽一覧から、特徴的なことを整理してみた。

- ③ 宮原・高野で一番多い御嶽は、9か所のカッチャー御嶽である。祭祀をフーツキョーカと呼んでいることから、祭神はフィゴの神、フーヌヌスである。
- ② ユースヌス御嶽は5か所ある。主神はシマヌパ(午方)ユースヌスとも呼ばれている。この神は農業・豊作の神として崇められ、一緒に水の神や竜宮の神が祀られている。
- ③ 4つ里にはウブ御嶽が建立されている。「ウブ」は「高い、大きい」御嶽で、祭神は天の松金、飛鳥爺、西銘主、炭焼太良である。西銘御嶽や飛鳥御嶽もウブ御嶽である。
- ④ 里御嶽や一門の御嶽にも天界の使い「天の松金」が祀られている。南増原、瓦原、土底、宮積、スナ御嶽のテンノマツカニ、テンヌシュー、マツガニである。
- ⑤ 6柱以上の神々が鎮座する御嶽が13か所ある。里人の出身地の神を祀ったものである。
- ⑥ 飛鳥御嶽の中通イがすべて里にある。なお、長間に5か所の飛鳥御嶽の中通イがある。西銘間切に入っていた村であったことを示している。

(2) 宮原の年間祭祀

祭 祀 名	目 的	里名と御願カ所	期 日
タテバン (立番、願い) 願い立	今年の祭祀予告	宮積 4カ所 ムテヤ 3 スナ 3 南増原 4 北増原 4 土底 5 更竹 2 高野大神 2	旧暦3月 きのえ とり 旧暦3月 つちのと とり 旧暦3月 つちのと とり 旧暦2月 みずの とり 旧暦2月 きのえ さる 旧暦3月 きのえ とり 旧暦3月 きのえ とり 旧暦3月
麦プース°	麦の豊年祭	宮積 4カ所 ムテヤ 3 南増原 4 北増原 4 土底 5 高野大神 2 高野水納 2	旧暦3月 つちのと とり 旧暦3月 つちのと とり 旧暦3月 きのと とり 旧暦3月 つちのと さる 旧暦3月 きのえ とり 旧暦2月 きのえ とら 旧暦4月
海ザニツ	大漁、航海安全	宮積 1カ所 ムテヤ 1 スナ 1 南増原 1 北増原 1 土底 1 高野大神 1	旧暦3月 きのと う 旧暦3月 きのと う 旧暦3月 きのと う 旧暦2月 つちのと う 旧暦2月 きのと う 旧暦3月 きのえ う 旧暦3月
粟プース° (粟の穂) (すだる)	豊年祭	宮積 4カ所 ムテヤ 4 スナ 3 サガーニ 3 南増原 4 北増原 4 瓦原 5 土底 5	旧暦4月 きのと とり 旧暦4月 きのと とり 旧暦4月 きのと とり 旧暦4月 きのえ とり 旧暦4月 きのと とり 旧暦4月 きのえ さる 旧暦4月 きのと とり 旧暦4月 きのと とり

祭 祀 名	目 的	里名と御願カ所	期 日
栗プース°		更竹 2	旧暦4月 きのと とり
		高野大神 2	旧暦4月 きのえ とり
		高野水納 2	旧暦4月 つちのと う
後プース°		南増原 4	旧暦4月 つちのえ ねずみ
		北増原 4	旧暦4月 きのと とり
スツウプナカ	節の豊年祭	高野水納 1	旧暦4月 みずのと み
ユースタミ・シツ	豊作への感謝 生れ井へ感謝	宮積 4カ所	旧暦4月 きのえ うま
		ムテヤ 3	旧暦4月 きのえ うま
		スナ 3	旧暦4月 きのえ うま
		サガーニ 3	旧暦4月 きのえ うま
		南増原 4	旧暦4月 きのえ うま (車ダスキ、道路ダスキ)
		北増原 4	旧暦4月 きのえ うま (カープース°、パリダミ) (シートウガン、マキダミ)
		瓦原 5	旧暦4月 きのえ うま
		土底 5	旧暦4月 きのえ うま
		更竹 2	旧暦4月 きのえ うま
		高野大神 2	旧暦4月 きのえ うま
シートダスキ	生徒の健全育成	土底 5	旧暦5月
タビルウガン	航海安全祈願	高野水納 2	旧暦5月
スマフサラ	厄払い 害虫駆除願い	宮積 1カ所	旧暦5月 きのと うし
		ムテヤ 1	旧暦5月 きのと うし
		南増原 1	旧暦5月 かのと うし
		北増原 1	旧暦5月 きのと うし
		土底 1	旧暦5月 きのと うし
クムイ願い	豊作祈願	高野水納 2	旧暦6月 つちのえ ね
イソガン願い	大漁祈願	高野大神 2	旧暦6月 とらの日
ユークイ願い	豊作祈願	南増原 4	旧暦8月 かのと とり
9月ウプナカ	豊年祭	高野水納 2	旧暦9月

祭 祀 名	目 的	里名と御嶽カ所	期 日
ウガンプトウキ		高野水納 2	旧暦 10 月
フーツキョーカ	鍛冶の神に感謝	宮積 1カ所 ムテヤ 1 スナ 1 南増原 1 北増原 1 瓦原 1 土底 1 更竹 1	旧暦 11 月 8 日 旧暦 11 月 8 日 旧暦 11 月 8 日 旧暦 11 月 8 日 旧暦 11 月 8 日 旧暦 11 月 8 日 旧暦 11 月 8 日 旧暦 11 月 8 日
ヤーキダミ ミズダミ	家内安全祈願 防火予防祈願	宮積 4カ所 ムテヤ 3 南増原 4 北増原 4 土底 5 更竹 2 高野大神 2	旧暦 11 月 みずのと うし 旧暦 11 月 みずのと うし 旧暦 10 月 きのと うし 旧暦 11 月 みずのと うし 旧暦 11 月 みずのと うし 旧暦 11 月 みずのと うし 旧暦 10 月 みずのと とら
パリダミ ンナフカ	五穀豊穣	宮積 4 ムテヤ 3 土底 5	旧暦 11 月 きのえ とら 旧暦 11 月 きのえ とら 旧暦 8 月 きのえ とら
10 月ダミ	厄払い	高野大神 2	旧暦 10 月 きのえ
トスノバン (年の番、願い) 暮れの願い	祭祀終了報告	宮積 4カ所 ムテヤ 3 スナ 3 南増原 4 北増原 4 土底 5 更竹 2 高野水納 2	旧暦 12 月 きのえ とり 旧暦 12 月 きのと とり 旧暦 12 月 きのと とり 旧暦 12 月 みずのと とり 旧暦 12 月 きのえ とり 旧暦 12 月 きのえ とり 旧暦 12 月 きのえ とり 旧暦 12 月 きのえ ね

宮原の祭祀の集計

祭祀の種類 19種	里の祭祀回数(年間)	里の世帯	祭祀参加世帯
タテバン 8里、麦プース° 7里	宮積 10回	22 (22)	22
海ザニツ 7里、粟プース° 11里	ムテヤ 10回	10 (10)	9
スツブナカ 1里、ユースタミ 10里	スナ 6回	20 (20)	11
シートダスキ 2里、旅ウガン 1里	サガーニ 2回	5 (5)	2
スマフサラ 5里、クムイ願い 1里、 ユークイ願 1里、ウガンプトウキ 1里	南増原 12回 北増原 10回	29 (30) 28 (29)	29 28
9月ウブナカ 1里、フーツキョーカ 8里	瓦原 3回	24 (24)	20
イソガン願 1里、ヤーキダミ水ダミ 7里	土底 11回	11 (11)	8
パリダミ・ンナフカ 3里	更竹 6回	7 (7)	2
10月ダミ 1里、トスノバン 8里	高野大神 9回 高野水納 8回	16 (16) 18 (18)	13 14

()は自治会加入世帯

2-3 線香の使い方

宮原の各里の御嶽願いで使用されている線香は、幅が 2.4 cm、長さが 14 cmの平たい香である。細長く一本で作られた大和香を基準すれば、この平香の 1枚は 6本の香でつなぎ合わされている。平香 1枚は 1カガニと数え、4枚束ねたものは 1結(ユイ)と呼んでいる。平香は割れやすいように 1つひとつに筋が入っていて、半分に割ったものが半平で 3本香になる。つまり半平香は 3本、1平香は 1カガニと呼んで 6本香である。4カガニが束られると 1結と呼ばれ 24本となる。神への祈願の際は、参拝者の心情や唱え言が、線香の煙に乗って神に伝わると言われている。そこで線香の数には、いろいろな意味が込められているようだ。天と地そして海の神の 3柱に言づけするためには、3本の線香からなびく煙が必要となる。3本の線香を焚く意味は、天地海の神への願い事を伝えるためのもの。12本は 12支、12ヵ月、12方位の神への捧げ香と言われている。屋敷は 4角であるので屋敷神は 4本、門の神へは 2本とする。こうした線香の数への認識は各里とも共通している。しかし、神に捧げるウサギ香の数は、里ごとに変化があり興味深い。

(1) 宮積の線香の取り方、12本が基準(1結は 12×2)

- 案内香として、サスが 1カガニをイビに焚く。
- ウサギ(捧げるとの意味)香は各戸より参拝者が持参する。各御嶽ではサスが各戸より線香を集める。

ウサギ香の数は、ウプ御嶽とンメズン御嶽は1戸当たり1結2カガニ、ユーヌヌス御嶽は1結3カガニ、ミドン御嶽は1カガニとする。1結は24本

- ウプ御嶽の場合 宮積参拝世帯が24世帯×線香1結2カガニ=144カガニ
ウプ御嶽に鎮座する神は12柱、この12のイビ(神石)に144カガニの線香を平等に分けて捧げる。1柱に12カガニづつとなるが、正確に数えるようなことはしない。点火した線香を、親イビを先にして周囲のイビにも捧げる。水の主と竜宮の神にはミズ香(点火しない香)。

なお、御嶽に参加できない世帯は、サスに線香等は預けて「祈願」を託している。

(2) ムテヤの線香の取り方、3本が基準

- サスは、位牌を持つ世帯からドズ香1カガニ、マウ神を崇める人はマウ香1カガニを集めてイビに供える。案内香である。
- ウサギ(捧)香は各戸より参拝者が持参する。各御嶽ではサスが各戸より線香を集める。
- ウサギ香の数は、世帯分(ヤーキ香)2結+家族数(長男世帯も)+畑の筆数+車の台数×3本(1カガニの半分)。例えば、家族数8名+畑7筆+車5台×線香3本=60本(10カガニ)。ヤーキ香の2結+10カガニ 合計18カガニ(4結2カガニ)
- ムテヤの場合、1世帯平均のウサギ香を20カガニ×10世帯=200カガニ
サスは御嶽ごとに200カガニの線香を集め、8柱から12柱の神に平等に分けて供えている。捧げた線香は、1イビあたり20カガニ(5結)となる。

(3) スナの線香の取り方、12本と3本が基準

- 御嶽願いの線香は、サスがまとめて購入し準備する。
- 案内香は、サス2人分として2カガニを焚く。
- 親イビに捧げる線香は、すなわちウサギ香は24カガニ+3カガニ=27カガニとする。他のイビには、12カガニ+3カガニ=15カガニを焚く。

(4) サガーニの線香の取り方、12本と3本が基準

- 親イビに3結(12カガニ)を捧げている。1結は24本で12カ月と12方位を意味し3結は天地海を意味すると考えられる。他のイビには1結(4カガニ)、本数は24本で12の2つである。

(5) 南増原の線香の取り方、3本と12本が基準

- 線香はサスがまとめて購入し御嶽願いに備えている。半平を1と数えている。
- 神役6人分の「ドズ香」として取り案内香として捧げる。一人当たり半平(1カガニの半分なので3本になる)。
- うさぎ(捧げ)香は①12方分として12本、②屋敷の4角分として4本、③門の分として2本、④7地頭分として7本、里の29世帯分として29本、以上の54本(27カガニ)を親イビ(飛鳥翁の神)に捧げる。親イビ以外には7本(半平)を供えて焚く。水の主と竜宮の神にはミズダキ香とする。

(6) 北増原の線香の取り方、6本と24本(1結)が基準

- 1カガニを1本、4カガニは1結と数えている。線香はサスが一括して購入している。
- 案内香は門の分2カガニ、屋敷分4カガニ、鎮座する7柱の分7カガニ、計13カガニを香炉に焚いて、今日の祭祀を目的を神に告げる。
- ウサギ(捧げ)香は、①サスは5名で5結、幹事1人で1結、皿の主は1人で1結、以上の神約分が計7結、②里の戸数28世帯で28結、両方合わせて35結(140カガニ)を親神に絶えて焚いて供える。親神以外には7結を焚く。水の主と竜宮神にはミズダキ香。

(7) 瓦原の線香の取り方、3本が基準

- 案内香はサスが1人当たり1カガニ供える。
- ウサギ香は各戸で持参し、半平香(3本)を一人分×家族(長男家族も含む)人数分を焚いて供える。

(8) 土底の線香の取り方、12本が基準

- 線香はサスが各御嶽ごとに各戸から集める。
- ウサギ香は世帯分が1結(4カガニ)、家族分が1人当たり2カガニ×人数分である。サスが各御嶽ごとに各戸から線香を集め、鎮座する2から5柱の神に平等に焚いて供える。

(9) 更竹の線香の取り方、6本が基準

- 各戸は一人当たり1カガニを、家族人数分イビシに供える。

(10) 高野大神出身者の線香の取り方、12本が基準

- 線香はウサギサスが一括購入し、御嶽願いに備える。

- 大神出身者の御嶽願いでは、1枚が12本の香でつながった「大平香」を使っている。12本の「大平香」1枚を1結と呼んでいる。
- 案内香はサスの分として3結(12本の大平香3枚)を供え焚く。
- 1戸当たりのヤーキ香は、12枚「大平香」7枚(7結)である。16世帯なので 16×7 結=112結。分家は3結 \times 10戸=30結　本家分家の合計は142結。
- 142結の線香を高野大神中通イ御嶽の6柱の神に平等に捧げる。

(11) 高野水納出身者の線香の取り方、12本が基準

- 線香はウサギサスが一括購入し、御嶽願いに備えている。
- 線香は6本の平香を使用している。平香1枚を1ヒラと数えている。
- 案内香は1ヒラを焚いて供える。
- ウサギ香(捧げ香)は、1戸当たり2ヒラ(1ヒラは6本 \times 2)である。水納出身者は18戸 \times 2ヒラ=36ヒラ。36ヒラは36カガニでもある。これを高野水納中通イ御嶽の4柱の神に焚いて供える。

2-4 御嶽へのウサギムヌ(供物)

宮原・高野には44カ所の御嶽がある。祭祀に時の供物を、方言ではウサギムヌと呼んでいる。供物は御嶽ごとに、また祭祀ごとに違いがみられるが、大まかには2つに分類することができる。1つは時代的に古い御嶽祭祀であり、2つには比較的新しい里御嶽の祭祀である。古い御嶽祭祀は、宮古島の旧記に記録された西銘御嶽と飛鳥御嶽で行われている。また、高野の大神、水納出身者が、生まれ島から受け継いできた祭祀も古い御嶽祭祀に含まれる。

以上の西銘、飛鳥、高野を除いた宮原の御嶽は、比較的新して里御嶽と考えられる。この節では、古い御嶽祭祀の供物と比較的新して御嶽祭祀の供物の代表的事例を取り上げてみた。

(1) 古い御嶽祭祀の供物

年間祭祀には、タテバンやトスノバンのように神への報告を目的にした祭祀から、粟プース°のような神に豊作を感謝するとともに里人も祝いのご馳走をいただく祭祀まである。そのため供物も一様ではない。西銘、飛鳥の両御嶽の粟プース°(豊年祭)と高野水納御嶽のスツウプナカ(節大祭)では、里出身者や外からの参拝者、さらに来賓も参加することから、サスの家に里人が集まり、それ相応のご馳走を準備している。

事例1・西銘御嶽の供物　年間祭祀ごとに列挙する

①[タテバン願い] 塩、酒、洗米、パナユニ(生米)、キビナ(干し小魚)、トーフ、菓子。

- ②[海ザニツ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、刺身 30 パック、お茶 30 個。
- ③[麦プース] 塩、酒、洗い米、麦、キビナ、かんぴょう、トーフ、菓子
- ④[先アープース°] 塩、手作りのミキ、酒、洗い米、粟、刺身、野菜、おにぎり、
幹事とサスが準備する食材。
ミキの食材 100 人分・米粉 12 kg、麦こうじ 5 升、グラニュー糖 5 袋、その他
御握り食材 100 人分・米 18 kg、豆腐 6 丁、キビナ 4 袋、青ネギ、調味料
野菜の食材 100 人分・切干大根 4 袋、キビナ 2 袋、塩、豆腐、昆布、かまぼこ等
酒のつまみ・刺身 5 千円、酒一升、ビール 2 ケース、お茶 4 ケース等
- ⑤[後プース°] 自家製ミキ、塩、酒、洗い米、粟、野菜、御握り、刺身 5 千円、茶 1 ケース。
- ⑥[ユーヌタミ・シツ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、キビナ、かんぴょう、トーフ。
- ⑦[スマフサラ]・塩、酒、洗い米 パナユニ、キビナ、トーフ、
- ⑧[フーツキヨーカ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、キビナ、トーフ、お菓子、豚肉 6 千円、大
根 2 千円、お茶 1 ケース。
- ⑨[ヤーキダミ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、大豆、キビナ、お菓子。
- ⑩[トスノバン] 塩、酒、洗い米、パナユニ、キビナ、お菓子。

事例 2・高野水納御嶽の祭祀、スツウプナカの事例

- 花米・・・9 合の花米を 2 つの御膳に載せて供える。
魚クパン・・・なまり節を四つに切り、一皿に守載せ供える。
芋ミキ・・・自家製の芋ミキを角皿 2 個に入れて供える
粟ミキ・・・自家製の粟ミキをユノース 2 個に入れ供える。
ていまく・・・重ね皿に粟ミキ 2 皿、(1 皿には貝の形のイザク)。
なま魚、シームヌ(かまぼこ)・・・各 4 皿。

二才頭、サスとクパン座が準備する食材。

線香 1 箱、塩 1 袋、酒 1 升、ミス粉(もち米 350 円×3 袋)、刺身千円、なまり節
2 千円、かまぼこ 5 枚、米 3 kg、粟、サツマイモ。

(2) 比較的新しい御嶽祭祀の供物

比較的新しくして御嶽とは、旧山北集落に人々が入植したと考えられる明治の中期頃に創設されたであろう御嶽のことである。古い御嶽である飛鳥御嶽は、昭和 13 年に祭壇、^{ほこら}祠、参道、鳥居がコンクリートで造営された。西銘御嶽は陶器や土器、石垣、井戸などが残され、^{じょうせき}城跡としての跡と 14 世紀の西銘主も昭和 46 年に西銘城跡を囲んでいた石垣が建築資材に変えら、

コンクリート造りの祭壇、^{ほころ}祠、参道、鳥居が建立された。ところが、宮原の比較的新しいとみられる御嶽は、創建当時の形を変えずに保全されている。これは一つの大事な特徴である。

年間祭祀^{さいし}に関しては、古い御嶽祭祀と変わりはない。決定的な違いは参拝者が里人に限られていることである。里が20世帯以上であれば、宮積と瓦原のように豊年祭での共同炊き出しで「アンタリジュシー」（まぜご飯）をつくり神にも供えているところもある。しかし大方の里は、参拝者が10世帯で程度と少なく、御嶽への供物は各世帯ごとにこしらえている。豊年祭のミキも自家製ではなく、商品化された「缶入りのミキ」を代用するようになっている。こうした比較的新しい御嶽祭祀の事例として、ムテヤ御嶽の供物を取り上げてみたい。

事例1・ムテヤ御嶽の供物 年間祭祀ごとに列挙する。塩、酒、缶入りミキ、お茶、豚肉（スマフサラなど）はサスが準備する。洗い米、パナユニ（昔は花粟、今は生米）、野菜（重箱入り）は各世帯がこしらえて持参する。持ち寄った重箱入り野菜は、神へのお供えと参拝者のご馳走にする。

- ①[タテバン願い] 塩、酒、洗い米、パナユニ、キビナ(干し小魚)、
- ②[海ザニツ] 塩、酒、サンマ、お菓子、お茶。
- ③[麦プース°] 塩、酒、洗い米、麦、キビナ、各世帯から持参した野菜。
- ④[アープース°] 塩、缶入りミキ、酒、洗い米、粟、キビナ、各世帯から持参した野菜。
- ⑤[ユースタミ・シツ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、各世帯から持参した野菜。
- ⑥[スマフサラ] 塩、酒、洗い米 パナユニ、三枚肉、トーフ、御握りお茶
- ⑦[フーツキョーカ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、豚肉、各世帯から持参した野菜、お茶。
- ⑧[ヤーキダミ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、大豆、キビナ。
- ⑨[パリダミ] 塩、酒、洗い米、パナユニ、キビナ。
- ⑩[トスノバン] 塩、酒、洗い米、パナユニ、キビナ。

2-5 わら算の奉納とダキマス、ナーバイ願い

村番所の置かれた明治30年頃まで、村佐事の器用な手で作った「わら算」が、文書代わりに広く使われた。このわら算が宮原の御嶽祭祀では今でも作られている。わら算とは、稲・麦などの茎を使って、数量を記録し計算結果を示すもの。わら算には世帯人数を示す「ヤーキ^{やきな}屋家内算」、税の分量を示す「取り立て算」、家畜の頭数を示す「家畜算」などがある。宮原で奉納される「わら算」は、「ヤーキ算」である。材料は稲や麦の栽培が途絶えたため、「わら」の代わりにススキやソテツの葉が使われている。ススキの葉はスナ、サガーニ、南

増原、北増原、土底、更竹の各御嶽で、宮積、ムテヤ、高野水納御嶽では、ソテツの葉を使っている(写真参照 p-43-52)。奉納時期は粟^{ほうのう}プース°(豊年祭)の時と定まっている。

ヤーキ算の奉納は、里の戸籍を記録し神に報告することを意味したものの。一人ひとり里人の無病息災と子孫繁栄の願いを託したもので、神へのメッセージである。宮原の全ての御嶽で、今なおヤーキ算が奉納されていることは、明治、大正、昭和とマラリア病に苦しめられてきた村落民の、強い願いが反映されたものと考えられる。

ところで豊年祭で、ヤーキ算を奉納し無病息災を祈願するのはなぜだろうか。豊年祭は豊作をもたらした神への感謝であり、今後の豊作を祈願するものである。この目的の豊年祭に、無病息災、子孫繁栄の祈願するヤーキ算を奉納することは、地域の人たちの知恵ではなかろうか。主な目的の豊年祭を大事にしながら、住民が強く求める願い事にも対応していることになる。昔は2日間の豊年祭であったことから、最終日のマンサンの日にヤーキ算が奉納された。現在、大半の御嶽が1日だけの祭りであり、豊年祭の祭りを一区切りしてからヤーキ算が奉納されるようになった(宮積、土底)。ところが、時代とともに祭祀が簡素化される傾向にあり、豊年祭とヤーキ算奉納が、同時に行われるところもみられるようになった(ムテヤ、スナ)。

このようにヤーキ算は、豊年祭に追加された無病息災・子孫繁栄を祈願する合同祭となっている。このヤーキ算は里全体の願いを奉納するものであるが、これを引き継ぐ形で、個人的な「ダキマス」と「ナーバイ」が行われている。宮原の「ダキマス」とは、子どもが生まれた家の母親が、赤ちゃんを抱いて、酒と供物のお菓子をマス(四角い御膳)に詰めこんで持参し、神と参拝者に捧げることを、そう呼んでいる。抱(ダキ)いた赤ちゃんと供物の枡(マス)と解釈すれば、赤ちゃん誕生への感謝の捧げものが「ダキマス」だと考えられる。ナーバイとは戸籍の名前の他、御嶽神から童名を授かった人が、ナーバイ御嶽に線香と供物を捧げ、無病息災・長寿を祈願することである。昔、童名の命名は伝統的な儀式に乗っ取り行われた。複数の里御嶽の神名を、小さい紙に書き写す。その紙を折り畳み、ふちの浅い盆に載せる。世帯主が盆を揺すって、童名を占う。先に落ちる紙の名前が、その人の童名され、神から授かった名前とされた。ナーバイは「名が栄える」ことを意味し、名前を授けてくれた神への感謝と長寿を祈願する祭祀だと考えられる。

以上のように里人共同でヤーキ算を奉納し、無病息災、子孫繁栄を祈願するだけでなく、その後引き続き、個人的に祈願するダキマスやナーバイは、二重、三重の意味合いを持ち、その祈願の重さや深さを示した祭祀と言える。

まとめ

- 1、宮原と高野の旧地名である山北は、古層の村・西銘村に始まる。按司時代の1350年頃の村と考えられる。この西銘村の炭焼太良について、民俗学者柳田國男は全国の炭焼太郎の伝説と共通したところがあり、鍛冶職人の広がりを示すものと述べている。山北・宮原の各里にはカッチャー御嶽があり、フーツキョーカ祭が一斉に行われ鍛冶神への感謝が捧げられている。西銘城跡からは中国製の陶磁器や奄美のカムイヤキが見つかっており、九州とのつながりが指摘されている。また、炭焼太良・嘉播親の子孫である目黒盛一門の墓(外間遺跡)から出土した人骨は、分析の結果、沖縄本島や北方系と同じDNAを持っていることが明らかになった。こうしたことから、炭焼太良は大和(九州)から渡来した鍛冶職人との見方が強まっている。
- 2、嘉播の親の三代目後継者は飛鳥爺^{とびとりや}である。飛鳥爺が残した実績は、「西銘間切」と呼ばれるほど村々を立てたことである。西銘村はサガーニー帯と考えられる。おわて村は飛鳥城の前方あたり、現在の南増原や瓦原辺り。かたて村は山川あたり、きやけ村は長中からキャーギ辺り、いこむ村はイクンバリが考えられる。西銘村が「間切」と呼ばれるほどに勢力を拡大した背景には、嘉播の親から引き継いだ農具を作る鍛冶の力が大きかった。

西銘村は現在の宮原から長間までの領域である。この広い村々を飛び回っていたために飛鳥と呼ばれたのではなかろうか。
- 3、この頃は西銘村の全盛期である。1390年に白川浜から与那覇勢頭^{よなはせど}が初めて沖縄本島に船出している。また、中山王府の中国への進貢船が、白川浜に漂着している。与那覇勢頭は、この地で漂着した中山王府の大物・亜蘭匏とも接触したと伝えられている。この当時白川浜を含む西銘村辺りは、宮古島の玄関であった。
- 4、飛鳥爺が白川浜の決闘でだまし討ちに合い、亡くなったため西銘村は滅んだと伝えられている。しかし、白川浜の決闘の勝ち組である石原城主やウキミゾラは、飛鳥爺の従弟^{いとこ}糸数按司の仇討で滅ぼされる。時期的には目黒盛の幼少期で、与那覇勢頭の中山朝貢とほぼ重なる。飛鳥爺死すとも西銘村は健在で、忠導氏と白川氏の歴史的接点の場所でもある。
- 5、大野山林内には極上^{ごくじょう}の畑「いもひげもり」があった。最初は炭焼太良の長女ウモイミガ夫婦が開墾し、その後、糸数按司に預けられ、目黒盛が成人してから、この土地を取り戻している。当時の土地所有は、その一帯の領土の支配につながる。したがって、西銘村の間近に西銘按司一門・目黒盛がいたことは、西銘村の再建に都合が良いことになる。目黒盛の4代目子孫に仲宗根豊見親がいる。豊見親は西銘間切の領域だった長間田に、自らの莊園^{しょうえん}を開いている。ちなみに、この田圃は1937(昭和12)年まで忠導氏の所有地になっていた。忠導氏15世玄教は明治31-41年の東仲村の村頭である。

- 6、1600年代になると西銘村は荒野に化したと考える。1725年に西銘・飛鳥城の記述が見える。『球陽』などで、飛鳥の怨念を鎮めるため旧城を拝謁し、供物を捧げ祭祀をしたことが伝えられている。あわせて、飛鳥城下で村の再建が始まった。しかし熱病の為、村の再建は困難を極めた。「山川」に大神島の人を移住させたものの失敗に終わった。その後屋敷原に移転したが、ここでも熱病(マラリア)が流行り人口は激減した。百姓らの強い要求で喜屋慶地方への移転、1813年に村立てはようやく成功するのである。この長間村立ての事例は、飛鳥の怨念がマラリアであったことを示していると同時に、湿地帯の多い山北辺りは再建できなかつたことを物語っている。マラリア感染は明治、大正、昭和と続き、山北・宮原の発展を大きく妨げた。
- 7、山北に初めて入植者が入ったのは明治の直前である。首里から派遣された役人の指導で、土底と佐和地の田んぼが開墾された。開墾者は友利村と野原村の人々である。1874(明治7)年に西原村がつくられるが、山北はまだ開発途上にある。マラリアが開墾を阻んでいた。山北には1887(明治20)年頃に各里がつくられ、村番所も設置されたと考えられる。1895(明治28)年設立の細竹分教場には、山北の子供たちも通学した。1898(明治31)年の土地台帳に山北の各小字が登載され、4年後に作製された地籍図から、多くの山北里御嶽が確認できる。以上ことから人頭税廃止運動が高まる明治25-26年頃には、サトウキビ生産に意欲的な百姓が、各地から山北に入植し本格的な村落が形成された。それは転籍調査でも裏付けられる。東仲宗根村最寄山北が、独立して字東仲宗根添になったのは明治41年である。
- 8、山北の里名は、地形にちなんだもののほか、歴史や人物に由来している。宮積は「嶺の隅」すなわち「ンミのスン」がなまって「ンメズン」になったと考えられる。ムテヤは元屋で古層の村イクンバリに由来したと考える。スナは開墾者たちの出身地「砂川間切」の「砂」からきている。サガーニは下がる坂道の嶺あたりにある集落のこと。「サガス°ンミ」がなまって「サガーニ」になったと考えられる。増原は西銘主や飛鳥翁という優れた人・マサイピトがいた里(原)、「マサイパラ」がなまって「マスパリ」。瓦原は川に囲まれた川原の里が「カワラバリ」となった。土底は地中の粘土が露出し、低い湿地帯の地形に由来している。更竹はザラツキ嶺にちなんだ地名、佐和地は湿地帯の沢地、大野越は古くはウプニグスと呼ばれていた。漢字を当てれば大骨腰となるはずである。大和風のあて字によって地名の由来があいまいになっている。先人たちの付けた地名は、とても含蓄のある・意味深い言葉である。
- 9、宮原・高野には44か所の御嶽がある。1里あたり4か所である。御嶽の持つ特性は、ウブ御嶽、ユーヌヌス御嶽、サト御嶽、カッチャー御嶽に分けられる。しかし2つの性格をあわせもつ御嶽もある。ウブ御嶽は一番尊い神を祀った所で、天降りした神・テンヌマ

ツカニとともに西銘主・炭焼太良と飛鳥爺が祀られている。ユーヌヌス御嶽にはンマヌパ(午方)ユーヌヌスが祀られている。この神は農業、豊作の神である。一緒に水の神や竜宮の神も祀られている。サト御嶽には里立の神や里人の出身地や一門の神も祀られている。このサト御嶽にもテンノマツガニやテンヌシュー、サト井戸の神があわせて祀られ、ウブ御嶽の性格を備えたところもある。飛鳥御嶽へのナカドゥイ(遥拝所)は極めて多い。宮原9カ所、長間(5)、添道(4)、西仲(2)、下地(2)、西里(2)、東仲(1)、荷川取(1)、福里(1)、細竹(1)、合計28カ所である。この多さと広がり、マラリア感染予防への「歴史的的心理」(過去の地理的事象についての人々の心理的構造のこと)によるものと考えられる。カッチャー御嶽の多いのも特徴的である。各里でフーツキョーカ祭が行われ、主神のカッチャーヌカン、フーノヌスへの感謝が捧げられている。炭焼太良(西銘主)と真徳金(飛鳥爺)の鍛冶を広めた功績はあまり知られていない。

飛鳥御嶽の創設は1725年である。西銘御嶽もその頃と推測される。里御嶽の多くは、地籍図により明治35年以前であると確認できる。創設の確証はないが、明治20年以降と考えられる。旧家が創設した御嶽も、現在、里御嶽として拝んでいる。

10、ウサギサス、サス、幹事などで構成された祭祀組織は、北増原と南増原、高野でみられる。世帯も20世帯以上と比較的多い。10世帯前後の里は1人か2人のサスが神事役となっている。里の祭祀は年間6~10回ほどで、過疎の里は祭祀が極端に減っている。

祭祀はタテバン、栗プース[°]、フーツキョーカ等19種類にのぼる。スツウプナカは神役の担い手不足で、朝昼晩のうち一部のみが行われ、祭りの存続が危ぶまれている。

11、線香の取り方の基本は、3本+12本と24本である。宮積は12本、ムテヤは3本、スナは12本と3本などとサト御嶽ごとに違いはあるものの、天地海の神と12方の神に線香を焚くという考えは一致している。

供物は塩、酒、洗い米、生米(花ユニ)、キビナ、野菜・かんぴょう、豆腐、菓子など。供物の準備は世帯の多い里は共同で、少ない里は各戸で行っている。特に栗プース[°]では手作りのミキと混ぜご飯、海ザニツでは鮮魚、フーツキョーカでは豚肉などを準備する。

このように供物には変化があり、供物の中身の質量により、祭祀の規模が示されている。

12、宮原・高野では豊年祭・栗プース[°]に加えてわら算の奉納が行われている。わら算の中でもヤーキ算と呼ばれたもので、里の世帯と家族数が編み込まれている。戸籍簿を意味し、里に住む人たちの無病息災と子孫繁栄を神に祈願して捧げるものである。

豊年祭に引き続き、わら算奉納、ダキマス、ナーバイが連続的に行われるのは、子孫繁栄、無病息災・健康長寿への願いの深さを示していると考えられる。

13、宮原と高野の御嶽祭祀は、里人の神への感謝と願い事の成就を求める祈りの場である。

命の水への感謝、豊年大漁への感謝と祈願、鍛冶の神への感謝、無病息災と子宝への感謝と祈願、家内安全と防災への祈願である。何気ない質素な祈り、昔から引き継いできた伝統的な祭祀の中に、里人の暮らしぶりが反映されている。何不自由なく水が使える社会にあっても、井戸の神への御願^{うがん}によって、命の水の有難さ、生活の原点を悟るのである。少子化と小学校の廃校、高齢化、過疎化が進む中、わら算を奉納し子孫繁栄と無病息災、健康長寿を祈願することは、現実的な世情とも一致し、その反映でもある。御嶽御願^{うたきうがん}を通して、里人の共同意識が高まるのも意義深いものである。

- 14、ウサギサスの高齢化と参拝者の減少など祭祀組織の弱体化がみられる。祭祀の持ち方や進め方を知る者も減少した。今後は、神事の担い手であるウサギサスの確保と、サス役に対する里人の理解と協力が大事になっている。また、祭祀についての共通理解を深める必要がある。そのため里の関係者が、御嶽御願^{うたきうがん}をなぜするのか、どのようにするのかなどを話し合い、後輩たちに伝えることが非常に大事になっている。そして御願の継承のため、土底の親たちが、街中に住む息子や娘に、豊年祭・粟プース[°]への参拝を呼びかけ、成果を上げている事例をぜひ学びたい。

謝 辞

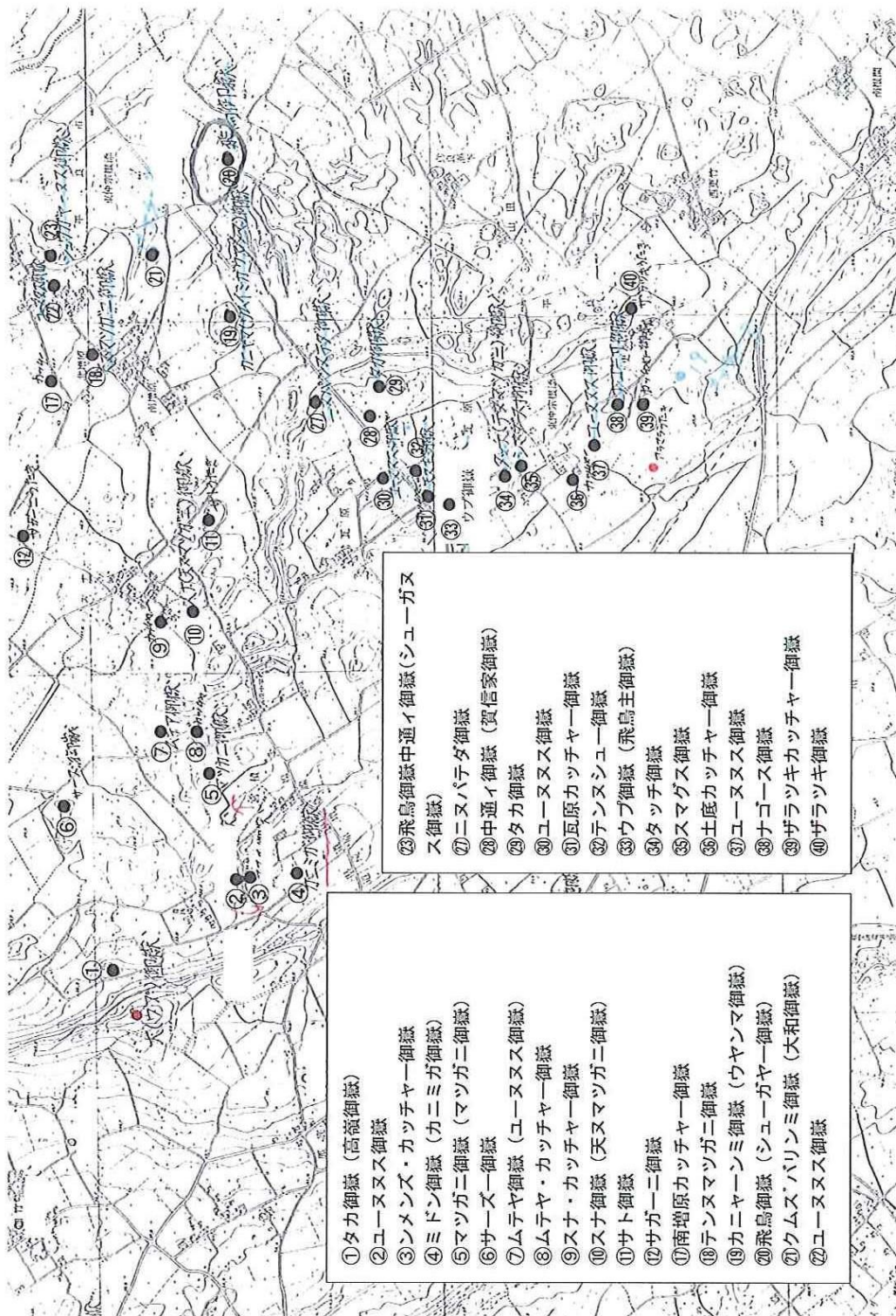
宮原の旧地名である山北の生い立ちについては、小禄恵良氏よりご指導賜った。小禄氏のまとめた「人物に見る宮原の歴史」はたいへん参考になった。

宮原と高野の御嶽調査に当たっては、次の方々にお世話になった。宮積は垣花千代さん、小禄恵栄氏、ムテヤは下地トミさん、池間初子さん、スナは友利アイ子さん、古謝洋子さん、平良トヨさん、サガーニは新里清一氏、南増原は西里源一氏、西里ヨシ子さん、仲宗根玄昭氏、仲宗根ハル子さん、北増原は久志ノリ子さん、久志恵徳氏、洲鎌吉光氏、瓦原は下里弦正氏、狩俣恵吉氏、土底は仲宗根千代さん、更竹は下里恵徳氏、高野は狩俣洋子さん、知念博明氏、知念栄子さん、以上の外、里の皆さんにもお世話になった。記してお礼を申し上げます。祭神については、故根間玄幸様の「宮原学区の御嶽」（『平良市史』9巻御嶽編）によるもので、ここに心から敬意を表するとともに、哀悼の誠を捧げます(合掌)。

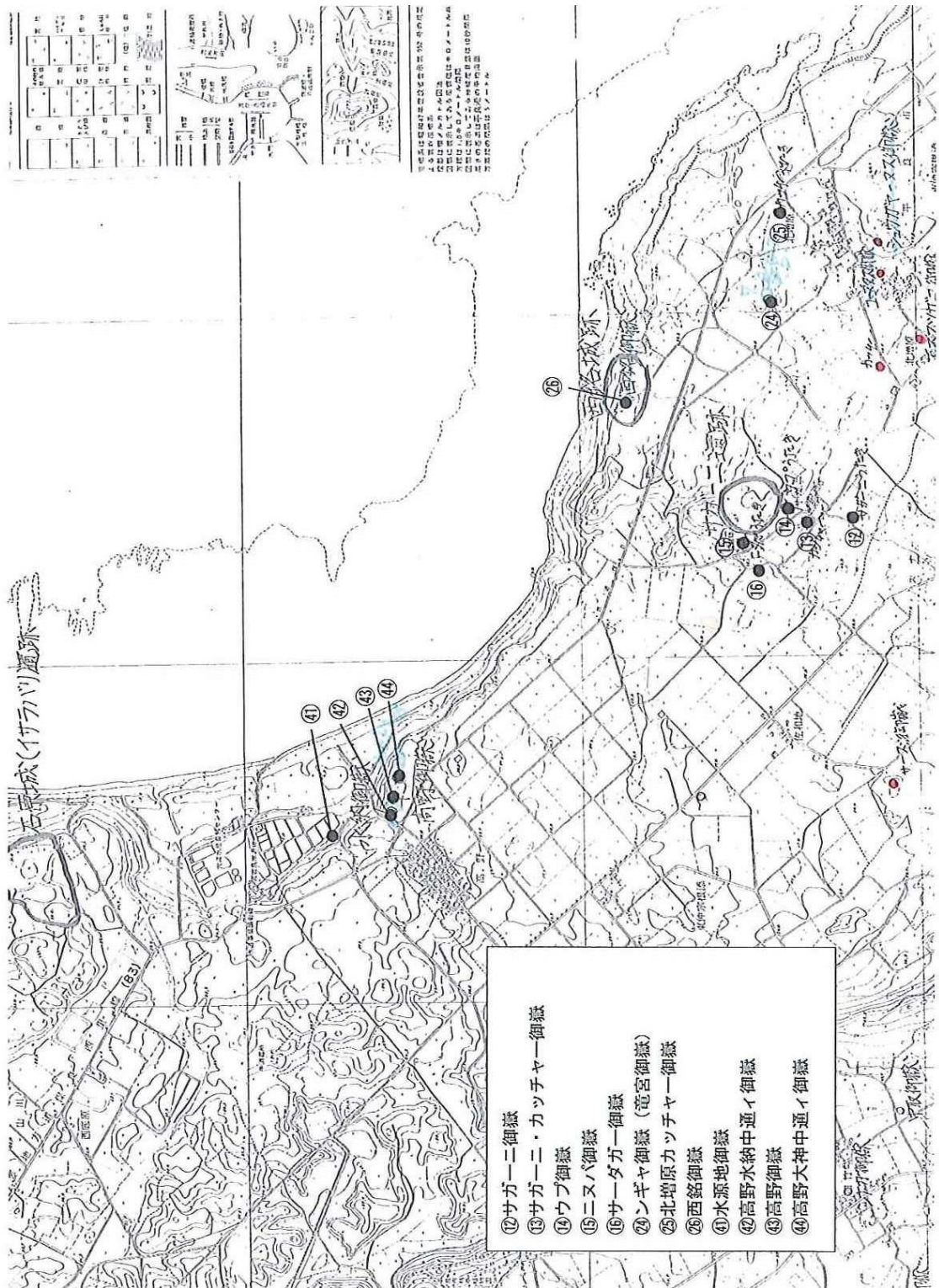
参考文献 50 音順

1. 稲村賢敷：1972「宮古島庶民史」三一書房.
2. 小禄恵良：2000『広報みやはら』第一巻 2000、第二巻 2002、第三巻 2006、宮原自治会.
3. 沖縄宮古連合区教育委員会：1972『宮古教育誌』宮古教育史編纂委員会.
4. 鏡原小学校創立 60 周年記念期成会：1984 『鏡小 60 周年記念誌』宮古印刷.
5. 慶世村恒任：2008「新版宮古史伝」富山房インターナショナル.
6. 球陽研究会：1974『球陽読み下し編』角川書店.
7. 九州国立博物館：2013「雲珠」福岡県古賀市船原古墳(5世紀).
8. 久貝弥嗣 2014 宮古郷土史研究会会報 203 号.
9. 崎浜 靖：2000 地籍資料を利用した歴史空間の復元作業(1)－宮古・東仲宗根添における。土地整理法施行時の空間構成－『南島文化』22 号沖国大南島文化研究所.
10. 崎浜 靖：2003 地籍資料を利用した歴史空間の復元作業(2)－マラリア有病地の地理的性格－『南島文化』22 号沖国大南島文化研究所－.
11. 下地和宏：1983「飛鳥爺の時代－村落の消長をめぐって－」『宮古研究第 4 号』.
12. 篠田謙一：2014「DNA で考える沖縄の祖先たち」『琉球新報』2014. 4. 14－18.
13. 島尻勝太郎：1989「宮古の名子について」『沖縄文化』沖縄文化協会創設 40 周年記念誌.
14. 砂川玄正：2008「講座用教本宮古島記事仕次」宮古印刷.
15. 砂川明芳：「宮古島郷土史考」第 3 部 1984 第 5 部 1989 第 7 部 1993 宮古印刷.
16. 多良間村史編集委員会：1993『多良間村史第 4 巻』資料編 3.
17. 平良市史編さん委員会：1987. 平良市史第 7 巻』資料編 5 民族・歌謡. 平良市教育委員会.
18. 平良市史編さん委員会：1994『平良市史第 9 巻』資料編 7 御嶽編. 平良市教育委員会.
19. 平良市史編さん委員会：1980『平良市史第 3 巻』資料編 1 前近代. 平良市教育委員会.
20. 福地廣昭：1989「沖縄の鍛冶屋」南島叢書.
21. 仲松弥秀：1977「古層の村・沖縄民族文化論」沖縄タイムス.
22. 波平勇夫：1999「近代初期南島の地主層－近代移行期研究」－第一書房.
23. 長浜数子：1979「宮古歌謡ピャーシグイ論(上)」『沖縄文化』通巻 52 号沖縄文化協会.
24. 宮古島市史編さん委員会：2012.『宮古島市史第一巻』通史編'. 宮古島市教育委員会.
25. 宮古島市教育委員会：2010『外間遺跡』宮古島市文化財調査報告書第 3 集.
26. 宮国文雄：1976「牧ぬ頭遺跡調査報告」『宮古新報』1976. 3. 23 より 17 回連載.
27. 柳田國男：1968「柳田國男集第一巻」筑摩書房.
28. 山口源七：1905「予が眼底に映ぜる宮古郡の教育」『宮古教育誌』宮古連合区教委 1972.

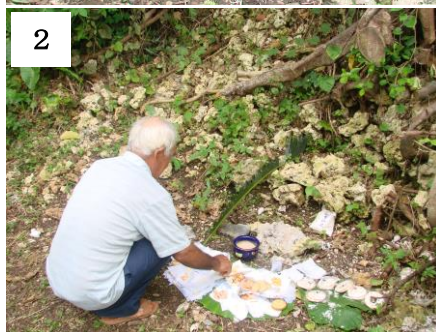
宮原・高野御嶽の位置



宮原・高野御嶽の位置



宮積御嶽の写真



1. シメズン御嶽 12柱 栗プース° 2. ミドン御嶽 1柱 栗プース°
3. ユーヌヌス御嶽 13柱 栗プース° 4. タカ御嶽 12柱 栗プース°

(写真 2013. 5. 19)

ムテヤ御嶽の写真

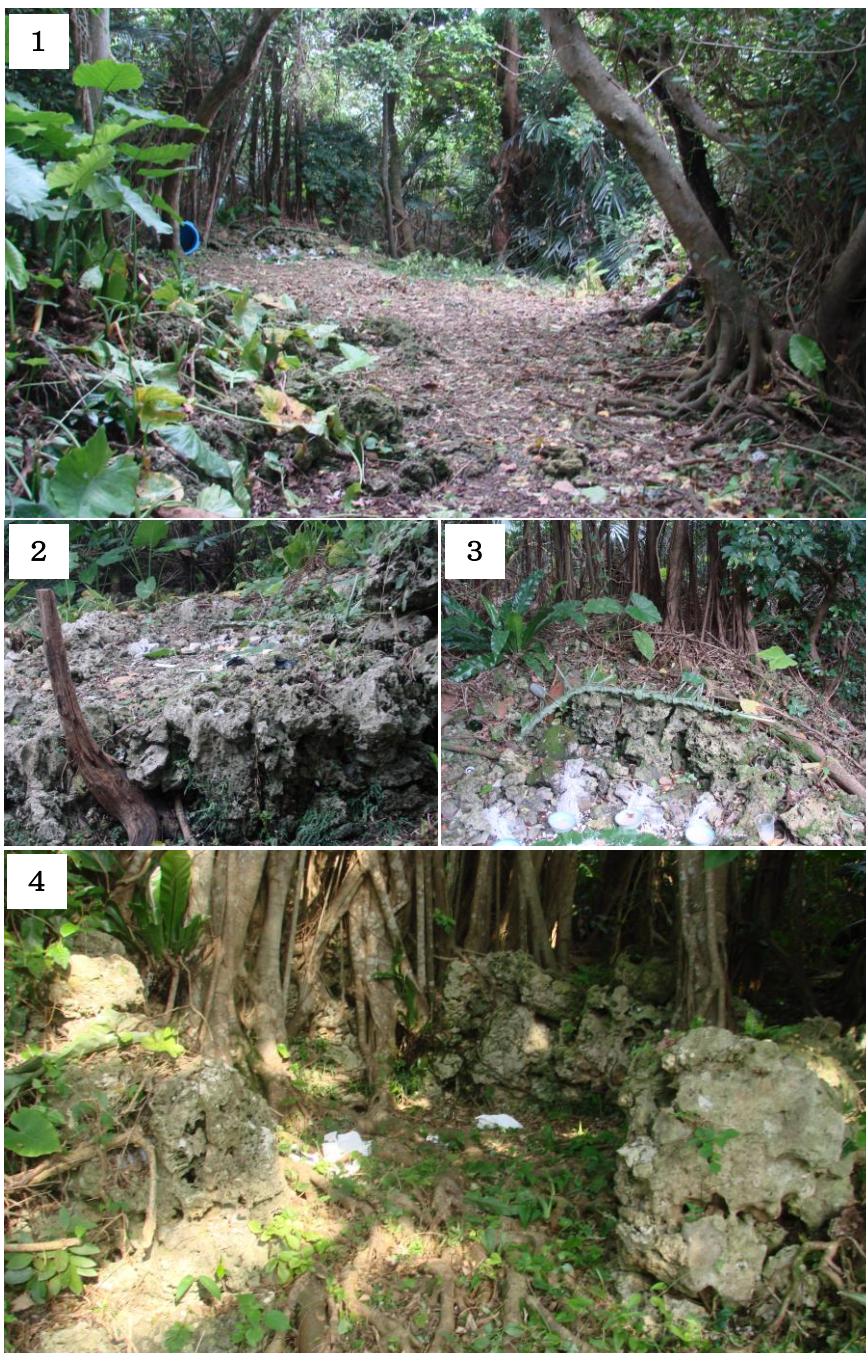


1. ンメズン御嶽 12柱 栗プース° (2013. 5. 19)

2. 各戸が持参した洗い米を集める (2013. 5. 19)

3. 各戸が野菜を持参 (2013. 5. 19) 4. ムテヤ御嶽 (2013. 5. 19)

スナ御嶽の写真



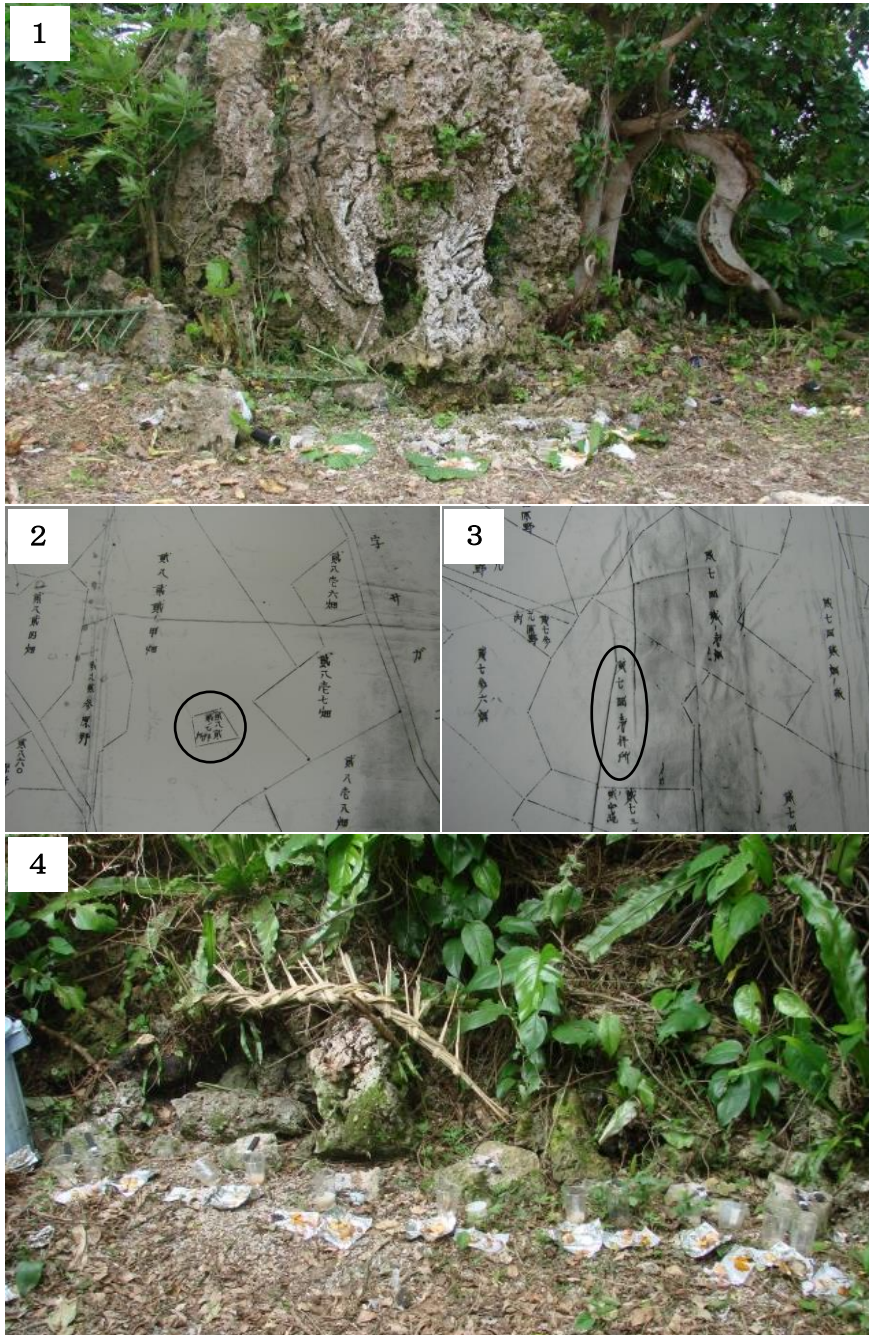
1. サト御嶽(2013. 5. 19)

2. スナ御嶽(2013. 5. 19)

3. 祭壇に奉納したわら算(2013. 5. 19)

4. スナのカッチャー御嶽(2014. 12. 29)

サガーニ御嶽の写真



- 1. サガーニ御嶽
- 2. サガーニ御嶽 (明治 35 年地籍図 2822 番地拝所 ○印)
- 3. ウプ御嶽 (明治 35 年地籍図 2741 番地拝所 ○印)
- 4. ウプ御嶽 奉納わら算

南増原御嶽の写真



1. 飛鳥御嶽の祭壇 (2014. 5. 14)

2. 飛鳥御嶽の参拝者 (1992. 7. 8) 仲宗根將二提供

3. フーツキョーカ祭 (2014. 12. 29)

4. 飛鳥御嶽のわら算 (2014. 5. 14)

北増原御嶽の写真



1. 西銘御嶽の祭壇 (2014. 5. 13) 2. 栗プース°の参拝者 (2013. 5. 18)
3. フーツキョーカ御願 (2014. 12. 29) 4. 西銘御嶽 (2013. 5. 18)

土原御嶽の写真



1. タッチ御嶽 3 柱 (2014. 6. 23)

2. ユーヌヌス御嶽 (2014. 5. 15)

3. スマグス御嶽 (2014. 6. 23)

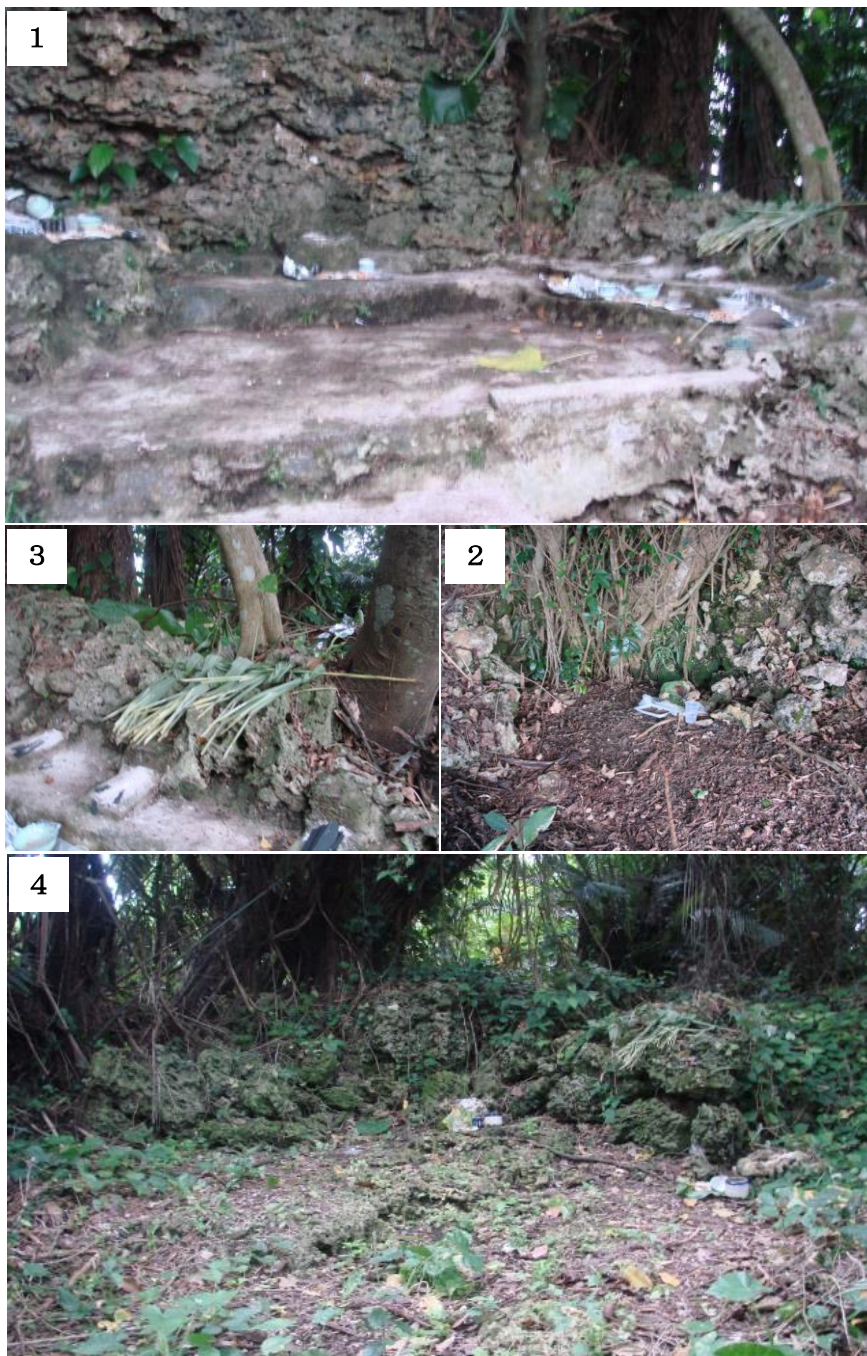
4. カッチャー御嶽 (2014. 12. 29)

瓦原御嶽の写真



1. タカ御嶽 (2013. 5. 19) 2. タカ御嶽のイビシの供物 (2013. 5. 19)
3. ティンヌシュー御嶽 (2013. 5. 19) 4. ユーヌヌス御嶽 (2013. 5. 19)

更竹御嶽の写真



1. ザラツキ御嶽 (2013. 5. 19) 2. 奉納されたわら算 (2013. 5. 19)
3. カッチャー御嶽 (2014. 12. 29) 4. ナゴース御嶽 (2013. 5. 19)

高野御嶽の写真



1. スツウプナカ祭の供物 (2008. 6. 22) 新垣則子・佐藤宣子提供 2. 高野 (水納) 御嶽
3. 水源地御嶽 (2014. 9. 28) 4. 高野御嶽の祭祀 (2008. 6. 22) 新垣則子・佐藤宣子提供